

昭和四十八年三月

大館市史編さん調査資料

第八集

国立史
料館蔵
大館地方資料文書

大館市史編さん委員会

宝曆九年

御目附様御下向之時被仰渡候御書付

卯六月

一 関重兵衛

扣

御国御目附様御下向御巡見之節、当所御着之上御尋在之節、諸役人并御本陣諸役人、其外共ニ御尋随ひ御答之次第申合被渡候書付、其外町々当所御着之上勤方共申渡書附別紙有

宝曆九年

卯六月

御目代

建部岩治郎様

安西彦五郎様

亭主様相勤申候

一 関重兵衛

覚

孝 姪

一、御目附衆御通筋え罷出候肝煎。百姓并御泊御昼休にて御宿致候者等御尋之義有躰ニかさりなく御答可申上候、於御宿ニ御尋之義書付御取候ハ、肝煎、長百姓等打寄り、遂吟味、無相違候様ニ可申上候事

一、御通筋之郡境馬継道程、又は神社寺院等、兼て能覚居、御尋次第無滞可申上候、名所旧跡御尋被成候義も可有之候御通筋之古城旧跡等御尋ニ随ひ承伝之通可申上事

上 御伊勢社 受岩社

下 御伊勢社 八幡社

上 八幡社

右合五社

禪宗 禪宗

宗福寺 玉林寺

一向宗 日蓮宗

浄心寺 蓮莊寺

浄土宗 浄土宗

一心院 極樂寺

真言宗 同

遍照院 清蓮庵

同 真言宗

伝清院 千手院

同 同

鏡寿院 万徳院

同 行人

密蔵院 宝泉寺

同

観喜院

寺院合拾五ヶ寺

修験

大福院

同

大学院

修験

村本坊

同

和光院

同

万宝院

同

養善院

同

伝行院

合七舎

当所之内枝郷餅田村西ノ方境より寄郷川口村地形、右両処地境より北の方大館町釈迦内村街道出合橋迄之間数并道拵丁場間数村附共ニ御尋も候ハ、左之通可申上候

外間数千九十四間 上御足輕入口より通町古川向迄

内式百六間 上御足輕町分

同 七百間 鍛冶町入口より川原町大通町川向間杭迄

同 百八十八間

右は大館町枝郷餅田

村地形より大館町釈

迦内村と地形境出合

橋迄丁場

十狐町分

間数式千八百三拾六間

惣間数、但御足輕町入口より通町出口迄之間数相除

内三百七拾三間

右は餅田村地形之内同村造り前

操舟拾艘

右は餅田村は長木沢下内沢川落合川之街道川渡

ニ御座候故、先年より舟十艘仮橋板右諸道具共

ニ御公儀様御物入を以山取被成下当村へ被下置

往還渡り場仮橋舟渡共ニ

仮橋板式拾八枚

相勤申候故、当村迷惑仕不申候

但し

右舟渡相勤申候ニ付、津輕様御上下其外指

右諸道具共ニ

たる御用様御廻之節ハ高割諸人馬御免ニ御

座候段御尋も御座候ハ、御答可申上事

同式百四拾七間

根家戸村造り前但し餅田村地形之内

同百四十四間

櫃崎村造り前但し餅田村地形之内

同九百四間

二井田村造り前

内八拾間

大館町之内枝郷餅田村地形之内

内八百廿四間

南ノ方様家戸村地形北之方片山村地形街道

両村支配

同四百八拾卷間 扇田村造り前

内式百七間 大館町片山村地形之内

内式百七十四間 大館町地形之内

同五百三拾四間 右同村造り前、但し大館町地形之内釈迦内

街道通町川向より北ノ方へ

同式拾三間 茂内村造り前、但し大館町地形之内北ノ方

へ

同百三拾式間 大館町造り前、但し同町地形之内茂内村造

り前より北出合橋迄之分

外ニ

大館町并寄郷之内根家戸村

大茂内村枝郷宮ヶ袋村岩神村

間敷式千四百式間 二ッ屋村下代野村上代野村芦田子村

右村々并当町共ニ釈迦内村地形街道之内丁

場造り前左之通ニ御座候

内四千八百十式間 大館町造り前、釈迦内村地形街道之内出

合橋より北ノ方へ

同式百五十八間 根家戸村造り前、右同断大館造り前より

北ノ方へ

同六拾五間 宮ヶ袋村造り前、右同断根家戸村造り前

より先キ北ノ方へ

内七拾卷間 岩神村造り前、右同断宮ヶ袋村造り前よ

り先キ北ノ方へ

同四十四間 二ッ屋村造り前、右同断岩神村造り前よ

り先キ北ノ方へ

同九拾四間 下代野村造り前、右同断二ッ屋村造り前

より先キ北ノ方へ是まで釈迦内村地形之内ニ御座候

同百六拾五間 右同村造り前、橋桁村地形之内右 下代

野村分造り前合テ間敷式百五十九間也

上代野村造り前、橋桁村地形之内、下代

同式百四拾五間 野村造り前より先キ北ノ方へ

へ

小釈迦内村造り前、上代野村造り前より

先キ北ノ方へ橋桁村地形之内

同式拾五間

同百三拾卷間

大茂内村造り前、橋桁村地形之内、小釈

迦内村造り前より先キ北ノ方へ

同十四間

芦田子村造り前、橋桁村地形之内、大茂

山乗物老挺

貳百九拾六文

内村造り前より先キ北ノ方へ右橋桁村地

此次人足四人

形是迄合五百八十間也

長持老棹

四百四拾四文

同五十八間

右同村造り前釈迦内村之内枝郷長面袋村

此次人足六人

但シ三拾貫目

地形之内、但し橋桁村地形芦田子村造り

受候事

前より先キ北ノ方へ

老里貳拾三丁四拾間

大館町より川口村迄道程并駄賃定

大館町より馬継道程并駄賃定

本荷老駄

五拾四文

左之通之事

輕尻老疋

三拾六文

四里貳拾丁四拾四間 大館町より綴子村迄道程并駄賃定

人足賃

貳拾七文

本荷老駄

百四十八文

輕尻老疋

九拾九文

老里五丁六間

大館町より釈迦内村迄道程并駄賃定

人足賃

七拾四文

本荷老駄

貳拾六文

但シ御伝馬并駄賃共ニ掛荷老駄は四拾貫目、人足之荷物

輕尻老疋

十七文

は老人ニ付五貫目

人足賃

十三文

附から尻荷物は五貫目迄荷なし同然、夫より重キハ本

荷駄賃ニ御座候

老里八丁三拾老間

大館町より白沢村迄道程并駄賃定

乗物老挺

四百四拾四文

本荷老駄

五拾三文

此次人足六人

輕尻老疋

三拾五文

人足賃

貳拾六文

三拾五丁四拾七間 大館町より餅田村迄道程并駄賃定

本荷老駄 三拾式文

輕尻老足 貳拾老文

人足賃 十六文

老里拾九丁四拾五間 大館町より扇田村迄道程并駄賃定

本荷老駄 三拾七文

輕尻老足 貳拾五文

人足賃 十九文

但し米代川と申候て大川舟渡場御座候

一木錢老人ニ付 八文

一同馬老足ニ付 拾六文

右之通御尋ニ随ひ御答可申上事

一在々町々其所限町数并町間之積

家数、男女之数、牛馬之数何ほと有之と兼て覚可罷有事

当所上御足輕町より十狐町并町々共ニ間数、家数、人数、

橋々共ニ御尋も候ハハ左之通可申上、牛馬共左ニ相印候

御尋無之候ハハ申上候ニハ不及候事

間数貳百六間 上御足輕町

家数六拾軒

但し右町之内石橋式ヶ所

御公儀様御入目を以拂被下候

間数六拾六間 鍛冶町

家数貳拾六軒

比人数百五拾三人

内八十老人男

同七十式人女

但し右町之内 橋老ヶ所

郷中より掛来申候 橋材木ハ拜領仕申候

間数百四拾六間 大町

家数五十八軒

比人数四百貳拾九人

内貳百貳拾五人男

同貳百四人 女

馬数 拾疋

間数百貳拾貳間 新町

家数六拾四軒

比人数三百七拾六人

内式百三人 男

同百七拾三人女

馬数貳拾九疋

間數百七間

馬苦勞町

家數五拾六軒

比人數三百四人

内百六拾五人男

同百三拾九人女

馬數十五疋

但し右馬苦勞町之内橋卷ヶ所

郷中ニテ掛來申候、御材木ハ拜領仕申候

間數九拾八軒

中町

家數五拾貳軒

比人數三百十九人

内百七拾七人男

同百四拾貳人女

馬數十五疋

但し右中町之内橋卷ヶ所

右同斷

間數五十九間

柳町

家數十七軒

比人數五拾九人

内三拾貳人男

同貳拾七人女

但し右柳町之内橋卷ヶ所

右同斷

間數三拾四間

風呂屋町

家數六軒

比人數貳拾八人

内十六人男

同拾貳人女

但し右風呂屋町之内橋卷ヶ所

右同斷

間數百五拾壹間

田町

家數貳拾九軒

比人數百七人

内五拾六人男

同五拾壹人女

馬數四拾疋

但し右田町之内橋三ヶ所

右同斷

間數八十間

大工町

家數三拾貳軒

比人數百六拾九人

内八拾九人男

同八十八人女

但し右大工町之内橋卷ヶ所

右同斷

間数七拾間

川原町

家数貳拾貳軒

比人数六十七人

内三拾六人男
同三拾零人女

馬数十五疋

但し右川原町之内橋式ヶ所

右同断

間数四拾四間

通町

家数貳拾貳軒

比人数九拾貳人

内四拾八人男
同四拾四人女

馬数貳拾四疋

但し通町之内町末迄ニ橋数四ヶ所

右同断

間数百三拾六間

下夕町

家数四拾七軒

比人数百五拾人

内七拾九人男
同七拾零人女

馬数四十八疋

間数百八拾八間

十狐町

家数五拾五軒

右惣町数合拾四町

内貳町

右は御通筋之内御内町分故除、但し上御足

輕町十狐町分

殘拾貳町

右は御百性町町人町共ニ入込ミ

大小共ニ

比惣家数合四百三拾零軒

比惣人数合貳千貳百五拾三人 内千貳百()

同千四十六人女

惣馬数合百九拾六疋

間数八百七拾零軒

右は上御足輕町入口より北ノ方え鍛冶
町、大町、田町、川原町、十狐町、通

町出口迄之間数

間数七百貳拾七間

右は通町出口より北ノ方え当町と釈迦

内村地境出合橋迄之間数

家数零軒

一向宗

穢多

比人数 貳拾式人 内拾壹人男
同拾壹人女

家数 壹軒 日蓮宗 乞食

比人数 四人 内貳人男
同貳人女

免六ツ成より五ツ成四ツ成迄

六ツ成高百八十石三斗六升六合 大館之内枝郷 餅田村

内貳拾壹石三升三合 御蔵入高

同百五拾九石三斗三升三合 御給分高

家数 貳拾三軒 右同村

比人数 九拾人 内四十九人男
同四十一人女

馬数 貳拾壹疋 右同村

伊勢堂

相善堂 右同村

稻荷は撰社ニ御座候

一、其所之高郷免御尋ニ随ひ有様ニ可申上候
御蔵入給分高入組候村は其趣共ニ可申上候事

御伝馬所

六ツ成高千五百四拾八石七斗六升壹合 御蔵入大館町

但し免五ツ七步成より三ツ成までニ御座候

一、郷免之次第、猶御尋ニ候ハム檢地之時免位考在之処ニ寄定免
不同有之、高免は七ツ五步

其外式ツ成迄段々在之、檢地之竿は六尺五寸ニ御座候、斗代
御尋候ハム一畝上田壹斗五升、中田壹斗三升、下田壹斗、下
々田七升等之儀覚候通可申上事

一、物成之儀御尋候ハム六ツ成高百石ニ付五拾九石貳斗納申候、

新田之儀御尋ニ候ハム当所ニは新田無御座候、新田は御宥赦
在之由ニ承候趣可申上候事

一、物成米之外小役銀と申候て六ツ成り高百石ニ付蔵入は銀三百
八拾目、給分ハ銀四百三拾目、伝馬所之村は銀百四拾目相
納、物成皆済之時御蔵入米・給分前共、右小役銀之内扶持方
引米在之候、并伝馬所除屋敷ニテ物成小役銀等出申村も有
之、土地ニ寄り右小役銀之内宥赦在之、納候も御座候由可申
上候

右小役銀仕分御尋候ハム薪・萱・雪垣・糠・藁代之次第銘々
可申上事

但シ当所之儀は御蔵入高御伝馬所故、屋敷高一円御免被成
下、田畑作候御百姓持高ハ 六ツ成高百石ニ銀百四拾目宛
納申段御答可申上、勿論御引米ハ御皆済之節被下候と可申

上候事

一 銀百四拾目 蔵入伝馬所小役銀定

内六拾目 雪垣代

同拾五目 糠代

同六拾五目 藁代

一 御給分高小役銀等之義、御尋候ハ、左之通可申上候、御尋

無之ニ不及申上候

一 銀四百三拾目 御給人分小役銀定

内六拾目 雪垣代

同拾五目 糠代

同六拾五目 藁代

同六拾五目 萱代

同百八拾目 釜木代

同四拾五目 春垣代

一 銀三百八拾目 勝伝馬所小役銀定

内六拾目 雪垣代

同拾五目 糠代

同六拾五目 藁代

同六拾目 萱代

同百八拾目 釜木代

一、三割半増銀之義、右銀等申誤候者在之候、只今不殘文金銀

ニ引替通用有之上ハ、右金とは申間銀候、右之小役銀等は、古來定候役銀ニ付、三割半之増歩ニテ、納候義御尋無之、此方より不及申上候間、銀何分と申上、増歩之義文銀高等は不及書上候

自然あなたより御尋有之候ハ、左之通可申上候

一、三割半増歩之儀御尋ニ付申上候、御当国は御隣国ニも無之

昔より銀遣候処、元文元辰年文銀御増歩ニ付、古銀は江戸

・上方へ為御登□□増歩を以御引替道中掛物有□新銀取交

り、取遣り仕候処、□□銀ニ引替候已後、諸物ハ次第高直

ニ罷成、殊ニ右小役銀は古來相定候銀高ニテ、慶長新銀三

拾割増御引替已後も無差別銀高之故、中頃四割八歩之割増

ニテ納候ニ付、錢定銀百目は文銀百四拾八目ニ御座候、錢

定と申儀、銀遣ひ之御国ニテ古來錢相馬通用之次第有之定

ニ候、銀高故錢定と唱申候

勿論右錢定銀之節も小役銀之内品ニテ指上候時は、四割八

歩之増を御引米被下候得共、近年不作打続、御百姓困窮ニ

罷成候ニ付、御宥恕之思召を以實延元辰年より老割三歩被

相減、三割半之増歩ニ相定、上より被下候ものも、古來御

定之銀は右之増歩を以被渡下候、勿論惣して納銀御渡銀共

ニ文銀通用無差支取遣仕候

一、不作之事、毛見出候て定免之内毛引有之殘物成納申候、差

て不作之年ニ無是候ても、一村百姓持高之内、作毛不冝申

立候得ハ是又毛引被下候故、豊年と申候ても年々上之御引方は在之儀ニ御座候事

一、火事ニ逢候村有之候得は、当然不相続者御救米被下、普請致候ニ付てハ、家材木山被明下并銀米被下、又は拝借等ニも被仰付候

右火事之時節ニ寄其村之様子ニ寄、物成小役銀捨りニ被成下、又は納方被延下候事

一、不作・火事ニ逢不申候得共、其土地免位相恥し不申村は、御宥赦高有之、定免之内減候て、物成納之義年越銀御吟味被仰付候、或は物成小役銀等掛り有之、百姓格別之訳有之候得ハ、右掛被捨下、又は年賦禁等被仰付候儀も年限御吟味、或は山林取立候村、又は百姓人別ニ取立候山林共、其村其百姓難義之時、右林被下、或は及飢ニ候者在之候時は、人別御吟味之上渡世ニ取付候迄之日數御救被下候

若又寄り所無之者路道ニ立候得は、久保田御城下之末ニ先年より御施行小屋相立飢人御宛行被下、或は其処ニおいて御救被下候

其上近年村々作食御貸米之法を被立置、惣して高掛之御貸米年々有之候故、心易農業仕候事

一、前段三ヶ條御救筋之儀、御尋ニ随ひ可申上候、且亦御威郷・給郷不限百姓当り善悪御尋か、又三割半増銀等之儀御尋ニ随ひ有様ニ申上義は勿論ニ候、其外百姓収納方役銀等之

儀申上候ニ引継、右御救之筋之儀、其村ニ不相願候共、他村在之趣を以段々御救品々之次才御尋ニ無之候とも不殘可申上事

一、作食御貸米之儀、委細御尋ニ候ハ、春二月被貸下、其年十一月返納仕、翌春被貸下高は、其村百姓持高ニ恥し被貸下候右御本米御才覚之為并親郷相立請拂之入目在之付、芻割半之利足を以返納仕候、御本米之儀、親郷限受拂之米高は相知候得共、惣本米減と存不申候、御蔵入高・給分高無差別被貸下候故、惣御本米不少儀可有御座候、右御貸米相始候以後拝借仕度者は、勝手次第申上、御吟味之上年々被貸下候故、田畑仕付候節扶持方用意案堵仕、別て御恵ニ罷成候段可申上候

尤其所之御貸米高御尋候ハ、意得候通可申上事

当所拝借御貸米并寄郷技郷共ニ村數拾三ヶ村へ御貸米、御元米御米高御尋ニ候ハ、左之通申上、御百姓作食等指支不申、心易田畑手入仕候趣可申上事

御貸米御本

米三百拾九石五斗三升壹合

大館町并寄郷共十三ヶ

村にて拝借米

右之通御尋之上可申上候事

一、五升米之儀御尋候ハ、田畑へ掛候堰・川・堤等之諸普請請

人足ハ其所高百石ニ付五十人之定人足を以相申中筈候得共、

大破ニテ不足之時、他郷并其郷之普請ニも加人足出候をい

にシへ鍵当人足と申候て 村々より差出し年ニ寄敷多之人

足差出、別て遠方へ出候時は迷惑仕候ニ付、六ッ成高拾石ニ

付米五升宛、其年之暮、翌年之春・夏と三度ニ都合五斗宛

人足代として上納仕候、其村々勤ニ寄五斗之内御宥敷在之、

三斗式斗、或は老斗五升納申候も在之、伝馬所等ハ一切御

免ニ候、右五斗米代を以雇人足ニテ手前之田畑へ掛候普請

計上之御入目ニテ普請被成下候故、五拾年斗已来鍵当人足

出不申候、并古来より之高千石ニ付夫丸老人之割ニテ御台

所へ相詰候を上之御雇ニ被成、給分之高其地頭江戸勤之節、

高百石ニ付夫銀八拾目ツ指上候を上より御渡被下、又は

御鷹餌取ニ在々相廻候餌刺賄入目等皆御免被成下、右御入

目ニ罷成、右米下直之相場を以代銀ニテ上納仕、旁百性勝

手ニテ五斗米上納仕候旨心得候通可申上事

当所は御伝馬所故、五斗米一円御免、御小役銀御宥

敷有之、屋敷高も御免、其外御助成米等も年々被下

置候故、御伝馬佐還通共ニ心易相勤申罷在趣御尋ニ

随ひ可申上事

一、漆之木之事御尋ニ候ハ、御検使出候て為御取被成候漆之裏

は其村へ被下候故、御用之代錢被下亮上申候、右漆夷代錢

等御尋ニ随ひ可申上事

漆夷御直段御尋ニ候ハ、左之通可申上事

里漆賣売升ニ付 代錢拾八文

山漆賣老升ニ付 代錢拾六文

右之通ニ御座候故、御百性勝手筋ニ罷成申候趣、御尋

ニ随ひ可申上候事

一、諺馬之儀御尋ニ随ひ可申上候事

駒上直段 貳百目

駄上直段 百貳拾目

但し御定御直段之内 駒ハ半銀右馬主ニ被下候

駄馬ハ代銀之内三ヶ式馬主ニ被下候、且諺馬御役

人并銀御渡役人御廻り之節ハ御旅籠代錢被下候故、

村々ニテ失墜は一切無御座候

一、馬役錢御尋ニ候ハ、諺銀老刃ニ錢式文ツ出申

義御答可申上候、御尋無之候ハ、不申上及候

一、酒造米之儀御尋ニ候ハ、其処其年造高酒屋敷共可申上候、

役銀之儀御尋ニ候ハ、水酒老升ニ付銀八厘宛御定之通銀高

右造高へ掛候て 此役銀何程と可申上、役銀割合御尋ニ候

ハ、水酒老升ニ付八厘掛リ之儀可申上事

当所酒造米之儀御尋候ハ、左之通可申上候事

一、酒造米五百六拾石余 大館町惣酒屋

此水酒四百五拾石程

御役銀三貫六百拾五匁 但し水酒壺升付銀八リ

ン宛

右之通御尋ニ候ハ、可申上事

一、右之酒役古來御定之分ニテ銀高何程と申上三割半増銀并文銀高等申上間數候自然なたより三割半増し銀之儀御尋ニ候ハ、小役銀之処へ印候通何れも古來御定銀高ニテ割増之義可申上事

一、切支丹宗旨御改之儀御尋候ハ、年々五月・六月之内御改在之儀、何れも存候通可申上事

一、街道筋・脇道共橋々は上之御入目ニテ被掛下、渡舟も上より御渡被成候、街道掃除場村割在之相勤、若道筋川欠損等有之時は、上之御入目ニテ普請致候義可申上候

猶又郷中ニテ掛來候小橋之儀御尋ニ随ひ材木被下候て掛替候橋は其趣とも可申上事

一、御通筋銀山何寄ノ、ニテ御尋も候ハ、院内銀山ハ次才衰微、只今ニテ茂悉銀出兼候次才、何れも存候通、又聞及候通可申上候、下筋銅山年來之儀ニテ次才ニ衰、銅出兼仕入は掛増、度々御吟味も在之様ニ承候段可申上候、其外大葛金山・古鋪鉛山等之儀も当分之渡世取統候趣存候通及承候通を以夫々ニ御答可申上事

附、院内銀山數年衰候て諸山師差上候御運上、江戸表

へ御上納銀不足ニテ年來御償被指上候由承及候趣可申

上事

一、馬繼ニ被立置候御高札御書替之儀、若御尋候ハ、此已前御書替之分文字見得兼、又は御家老名代等ニテ其年御書替有之由を可申上候、馬繼無之、此度御屋御泊ニ相成候村、切支丹之御高札斗有之義御尋候ハ、馬繼之外御札無之候得共馬市等有之か、又は馬繼ニ差繼人集有之所へハ切支丹之御札立候義可申上候、万一以前ニ捨馬御札所々ニ有之義御尋ニ候ハ、捨馬致間數、年來被仰渡候故ニ候哉、只今ニテハ大所之馬繼ニはかり捨り馬停止之御札、似銀停止之御札も相立、村毎ニハ無之由可申上候

又浦御高札之義御尋ニ候ハ、土崎・能代兩湊、其外浦々ニは御高札式枚宛在之由承候て可申上候事

一、津輕様御上下之節、御繼立人馬被差出候

- 一、御尋有之候ハ、已前より為御繼立人馬被〔 〕
- 去ル亥年無例凶作ニテ在々殊之外〔 〕
- 救等ニテ漸相統罷有候故、御繼立〔 〕
- 丑之年より近年中御断被成候段仰渡〔 〕
- 屯人馬被差出不申候と可申〔 〕
- 一、御泊御屋休之御宿、此度〔 〕
- 上之御入目ニテ出来致候由可申〔 〕
- 御屋御泊ニ成候内御宿守罷〔 〕

家と申上、假令御宛行被下候者たり〔 〕

百姓町人之趣可申上事

一、御代官此所ニ居候哉と御昼御泊り之継〔 〕
候ハハ根本忠蔵罷在候由可申上事

一、籠舎致候者在之が、死罪等ニ被仰付候もの有之かと御尋候
ハハ御法度背き候もの御詮義之上籠舎、又ハ過料・所拂・
厥所等ニ被仰付候、重き御料之者死罪ニ被仰付候も在之候
由可申上候事

但し当町ニハ左様之者無御座候段可申上事

一、右御答ニ引継可申上趣ハ肝煎・百姓之内ニも格別能勤候者
御褒美被成下、又親ニ孝行致候もの有之候得は、其次才被
入御念御尋之上御ほうび被成置候儀、其村ニ無之候共、此
已前より他村ニ在之、承候通能寛居有様ニ可申上事

一、銀札御仕方之儀并被相止候次才之義御尋無之ニ此方より不
及申上候、若御尋候ハハ公儀御届之趣も在之候候間、去ル
戊之年十二月より相始り、去々丑年七月被相止候由可申上
候、万一銀札中之儀委細可申上候御尋候ハハ左之通可申上事

一、去ル戊十二月より銀札御仕方御執り行之儀ハ数年不作
相統、延享四卯年五拾年来無是不作、其後年々作並不
宜、別て戊之秋不作にて、在々町々共指迫り候付てハ

御國中銀不足ニ相成候故、御救之思召にて被仰渡村々
町々有徳之者札元ニ被相定、最初正銀半分交り取遣り

致、銀札正銀相替候儀無之通用にて御惠筋ニ相成候処、

翌亥年無例不作にて田畠ニ不限実取無之候故、其所ニ
寄候ては初秋より御救米・銀札も不少被下、翌子之夏

ニ至り候得ハ御國中一統ニ喰物無之ニ付、正金銀を以
他国より御買米被成、在々町々へ被下候得共、飯米斗

リニも無之日用取続不申者ニは其所限銀札を以御救被
下候故、次才ニ銀札位賤く、去ル丑年夏中ニ至候ては

下々之通用銀札拾弍式三文之相場ニ相成候段被聞召、
御惠筋ニ不相成訳を以、同七月中被相止、所持之銀札

御引上ニ罷成壹匁ニ付壹文立を以右代錢拾ケ年ニ被下
置候

一、御泊、御昼村御着之節、其所之肝煎兩御宿之者共ニ上下着、
村末え罷出兩御宿致候者御案内致可申候、其節雨天にて

も雨具無しにて可相勤候、御出立之節も御出迎之通ニ心意
宿末迄罷出可申候事

一、御城様御知行高御尋候ハハ有躰ニ可申上候并御給人御家中
員数之事、左之通可申上候

御組下 三百人

御家中 式百人

上御足輕 六拾人

十孤御足輕 三拾人

右之通可申上候、御尋無之候ハ、不及申上候

一、当所御城廻御堀之事御尋候ハ、見覚候通可申上候、併幾重有之か、又ハ御城内間敷等之儀ハ御尋有之候ても存不申段可申上候事

一、半知之儀、御尋候ハ、半知等ハ申上間敷候、公儀御手詰ニ付、御諸士録之内御借被遊候、併段々割合違御座候由具サは存不申段可申上候事

一、長木沢之事御尋候ハ、山伐尽ニ相成候と可申上候事

一、当所御内町之儀御尋候ハ、左之通可申上候事

長倉町 横町 閑居町

三之丸 片町 裏町

谷地町 向町 後町

部垂町 赤館町 金〔 〕

近藤町 上町 中〔 〕

久保丁 古川町 〔 〕

上御足輕町 十孤御足輕町〔 〕

町敷合式拾卷町〔 〕

御免五ツ三步より四ツ八歩迄

一、六ツ成高三百四拾七石七斗三升〔 〕

内七石式斗三升卷合〔 〕

同三百四拾石五斗七合〔 〕

家数三拾六軒

此人数百拾四人 内六拾〔 〕

馬数四拾九疋

一、六ツ成高式百拾六石八升八合〔 〕

内八石式斗七升 御〔 〕

同式百七石八斗卷升八合 〔 〕分

家数式拾五軒

此人数百九人 内五拾六人男

同五拾三人女

馬数四拾九疋

右條々御国御目付様御巡見之節、御尋ニ随ひ先書ニ被仰渡候趣を以御答可申上候

惣して下々迄家主共能々取受申合、此度之御用ニ可被差出候此外被仰渡候次才も有是、別帳ニ具相印申渡候間、町々ニても写取不取受者ニハ幾度も申合、御用ニ可被差出候、段々御本陣御用其外御家老様等之御取扱諸役人数多被仰付候間、人数書追て可申渡候、已上

宝曆九年

肝煎

五郎兵衛

卯六月

同

嘉左衛門

惣丁代家

仮肝煎

新左衛門

同

久左衛門

大館御本陣

青山庄右衛門

亭主脇金屋嘉右衛門

相勤候加勢青田其外よ

リも出候

山田屋五郎兵衛

亭主仿一関重兵衛

相勤候加勢方々より罷

越申候

右津輕境迄御出、其日御帰以上式夜御泊御座候

天明三年

御貸米御調帳

卯正月廿五日

親郷秋田郡

二井田村

(一関文書 四二一〇四)

一、御貸米御本三拾七石九斗六升五合	二井田村	一、御貸米御本六石六斗式升壹合	赤石村
此俵数百五拾壹俵卜式斗壹升五合	但輕升式斗五升入	此俵数廿六俵卜壹斗式升壹合	但右同断
一、御利足米五石六斗九升五合	右同村	一、御利足米九斗九升三合	右同村
此俵数貳拾貳俵卜壹斗九升五合	但右同断	此俵数三俵卜式斗四升三合	但右同断
一、兩廻出目米貳石壹斗八升三合	右同村	一、兩廻出目米三斗八升壹合	右同村
此俵数八俵卜壹斗六升三合	但右同断	此俵数壹俵卜壹斗三升壹合	但右同断
一、御貸米御本壹石三斗	下川原村	一、御貸米御本五石三斗六升七合	板沢村
此俵数五俵卜五升	但輕升式斗五升入	此俵数廿壹俵卜壹斗壹升七合	但輕升式斗五升入
一、御利足米壹斗九升五合	右同村	一、御利足米八斗五合	右同村
一、兩廻出目米七升五合	右同村	此俵数三俵卜五升五合	但右同断
一、御貸米御本四石四斗壹升六合	出川村	一、兩廻出目米三斗九合	右同村
此俵数拾七俵壹斗六升六合	但右同断	此俵数壹俵卜五升九合	但右同断
一、御利足米六斗六升式合	右同村	一、御貸米御本貳石七升五合	小袴村
此俵数貳表卜壹斗六升式合	但右同断	此俵数八俵卜七升五合	但右同断
一、兩廻出目米貳斗五升式合	右同村	一、御利足米三斗壹升壹合	右同村
此俵数壹俵卜四合	但右同断	此俵数壹俵卜六升壹合	但右同断
一、御貸米御本拾貳石壹斗五升六合	權崎村	一、兩廻出目米壹斗壹升九合	右同村
此俵数四拾八俵卜壹斗五升六合	但輕升式斗五升入	一、御貸米御本上壹石壹斗三升八合	大披村
一、御利足米壹石八斗式升三合	右同村	此俵数四俵卜壹斗三升八合	但輕升式斗五升入
此俵数七俵卜七升三合	但右同断	一、御利足米壹斗七升壹合	右同村
一、兩廻出目米六斗九升九合	右同村	一、兩廻出目米六升五合	右同村
此俵数貳俵卜壹斗九升九合	但右同断		

一、御貸米御本五石卷斗五升七合

大子内村

此俵数式拾俵卜卷斗五升七合

但右同断

一、御利足米七斗七升四合

右同村

此俵数三俵卜式升四合

但右同断

一、兩廻出目米式斗九升七合

右同村

此俵数壹俵卜四升七合

但右同断

一、御貸米御本四石八斗式升

杉沢村

此俵数拾九俵卜七升

但輕升式斗五升入

一、御利足米七斗式升三合

右同村

此俵数式俵卜式斗式升三合

但右同断

一、兩廻出目米式斗七升七合

右同村

此俵数壹俵卜式升七合

但右同断

一、御貸米御本五石六斗六升六合

本宮村

此俵数式拾式俵卜卷斗六升六合

但右同断

一、御利足米八斗五升

右同村

此俵数三俵卜卷斗

但右同断

一、兩廻出目米三斗式升六合

右同村

此俵数壹俵卜七升六合

但右同断

一、御貸米御本五石六斗九升八合

前田村

此俵数式拾式俵卜卷斗九升八合

但輕升式斗五升入

一、御利足米八斗五升五合

右同村

此俵数三俵卜卷斗五合

但右同断

一、兩廻出目米三斗式升八合

右同村

此俵数壹俵卜七升八合

但右同断

一、御貸米御本九拾式石三斗七升九合

市五郎

此俵数三百六拾九俵卜卷斗式升九合

御利足米八斗五升七合

此俵数五拾五俵卜卷斗七合

兩廻出目米八斗五升三合

此俵数式拾壹俵卜六升三合

右米三口合百拾壹石五斗四升九合

此俵数四百四拾六俵卜四升九合

但輕升式斗五升入

右之通御見分相濟申候、以上

二井田村肝煎

市五郎

下川原村肝煎

新右衛門

大子内村肝煎

七右衛門

天明三年卯正月廿五日

平塚武右衛門殿

豊間多門殿

天明四年

御救米二井田村寄郷共ニ帳尻目錄

辰二月

村扣

(子関文書 一〇九)

御利足拾三石八斗五升七合

御材木四拾五石四斗九升

内九石五斗、此度調達取立分、村々御救米ニ相渡

家数百六十六軒

人数七百八人 壬正月

一、御救米三拾壹石八斗六升 二井田村

外拾七人四ツ子以下引

内四石三斗六升式合 右ハ無残当村御貸米御利足米ヲ

以相渡

同式石九斗 右ハ当村御材木増元米ヲ以相渡

候分

同式拾四石五斗九升八合

右ハ村々調達米ヲ以被下置候

家数十七軒

人数九十三人 壬正月

一、御救米四石壹斗八升五合 下川原村

内壹石五升 右ハ無残リ二井田村御貸米御利

足米ヲ以相渡

同六斗 右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同式石五斗三升五合 右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

候分

家数廿式軒

人数九十八人 壬正月

一、御救米四石四斗壹升 赤石村

外貳人四ツ子以下引

内九斗九升三合 右ハ無残リ二井田村御貸米御利

足米ヲ以相渡

同六斗 右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同式石八斗壹升七合 右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

候分

家数廿壹軒

人数八拾貳人 壬正月

一、御救米三石六斗九升 出川村

外五人四ツ子以下引

内六斗六升式合 右ハ無残リ二井田村御貸米御利

足米ヲ以相渡

同五斗 右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同式石五斗式升八合 右ハ久保田より仕送米ヲ以相

渡分

家数九軒

人数三拾九人

一御救米石七斗五升五合

寺崎村

外三人四ツ子以下引

内六斗九升

右ハ二井田村御貸米御利足米ヲ

以相渡

同三斗

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同七斗六升五合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

家数十六軒

人数七十壹人

一御救米三石壹斗九升五合

杉沢村

外貳人四ツ子以下引

内五斗五升五合

右ハ無残二井田村御貸米御利足

同貳斗五升

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同貳石三斗九升

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

家数四十壹軒

人数百五拾壹人

外四人四ツ子以下引

一御救米六石七斗九升五合

板沢村

内壹石貳斗

右ハ無残二井田村御貸米御利足

同壹石壹斗

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同四石四斗九升五合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

家数七十五軒

人数三百廿九人

一御救米拾四石八斗五合

櫃崎村

外廿壹人四ツ子以下引

内壹石七斗

右ハ無残二井田村御貸米御利足

米ヲ以相渡

同壹石五斗

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同拾壹石六斗五合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡分

家数十九軒

人数七拾四人

一御救米三石三斗三升

本宮村

外四人四ツ子以下引

内五斗五升

右ハ無残二井田村御貸米御利足

米ヲ以相渡候分

同五斗

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

同式石式斗八升

相渡候分

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

家數十軒

人数四十七人 壬

一、御救米式石斗七升五合

大子内村

外式人四ツ子以下引

内五斗七升四合

右ハ無残二井田村御貸米御利足

米ヲ以相渡

同式斗五升

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同式石式斗九升壹合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

家数十軒

人数五拾八人 壬

一、御救米式石六斗壹升

大披村

外三人四ツ子以下引

内五斗五升五合

右ハ無残二井田村御貸米御利足

米ヲ以相渡

同式斗五升

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同式石八斗五合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

家数十五軒

人数七十六人

一、御救米三石四斗式升

前田村

外六人四ツ子以下引

内六斗五升五合

右ハ無残二井田村御貸米御利足

米ヲ以相渡

同五斗

右ハ二井田村村木増元米ヲ以相

渡候分

同式石式斗六升五合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

家数十二軒

人数四拾九人

一、御救米式石式斗五合

小袴村

外一人四ツ子以下引

内三斗壹升壹合

右ハ無残二井田村御貸米御利足

米ヲ以相渡候分

同式斗五升

右ハ二井田村御材木増元米ヲ以

相渡候分

同式石六斗四升四合

右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

分

本郷支郷共ニ貳拾ヶ村

家数四百三拾三軒

惣人数千八百七拾五人

外七十人四ツ子以下引

此米八 拾四石三斗七升五合

但老日老人ニ付老合宛、日数四拾五日分御救米被下置候

内拾三石八斗五升七合 御貸米御利足米ヲ以被下置候

同九石五斗 右は御材木増元米之内ヲ以被下置候

置候

同六拾老石老升八合 右ハ久保田より仕送米ヲ以相渡

代五貫四百九拾老匁六分式厘

但米老石ニ付九拾目横、買米ニ而相調候分、運送

方掛り物ハ大凡指考ニテ

内老貫六百目 二井田村調達

同五百目 板沢村調達

同百五拾目 赤石村調達

同百五拾目 大子内村調達

同百目 小袴村調達

同式貫九百九拾老匁六分式厘 右ハ村々御裏判ヲ以調

達仕候分

内八百目

二井田村ニテ御裏判ニテ申受候分

同式貫九百九拾老匁六分式厘

寄郷村々ニテ右同断

天明四年

御新法方被仰渡御書附写

辰九月

二井田村

(一関文書 七九所収)

近年來御百性收納方甚々諸雜費相増、御定式御高ニ向諸上納之外、莫太ニ失墜有之候ニ付、追年困窮ニ相成候故、平年ニも作食毛引御助成願等申出、右願ニ向相応之御手当被下候得共、徒ニ往來物入、旅宿之費等相成、百性実用ニも不相成、其上右願筋等ニ付諸役回在、且不納取立之ため御催促給分共同断之失墜畢竟上之御損失、御百性も上之御惠筋は無用之諸雜費ニ相成、実用無之、連々貧窮相迫り作徳相見得不申ニ付、御田地ニ替無之、年々毎ニ無符人高・荒地廢田弥増、御蔵入も甚々減少致、隨て御家中も同断増々困窮ニ罷成、品々上之御苦柄筋申上候得ハ御時節柄ニハ候得とも、無御扱相応之御手当等も被下候事故、積年御難波之御財用御指支、江戸表御公務を始、御日用ともに此表以可被相弁様無之処、前件之通之仕形にては、第一之御田地ニ替無之、人々商等之心掛ニ相成、自然と修之風俗相染、此上御出物増減少之儀自然之事ニ候

左候得ハ夷御大事至極之事ニ有之候

仍て此節御評儀被相尽、右無用之諸雜費を相除、御百性御田地之相進ミ、荒地・廢田も再興致、御案堵之御仕法も有之哉と種々御評儀被成置候処、去年中非常之凶作ニ付、去冬中より御百性飢渴ニ相迫り春農も漸々作食御助成等にて是迄相統仕候然は今年一統豊熟と申唱候ニ相乘、今秋より御執行被成置候ハハ人氣も相向無御滞御仕法も相立可申、左ニ被仰付候

一、高式万石位を一扱ニ被成置、御代官交代勤ニ被仰付、四方便

利之村え役所建置、御收納を始、諸事此所へ取纏相勤可申候親郷肝煎は役所詰にて寄郷之取扱、諸事は迄之通御代官下知ニ随ひ可相勤候

御代官老人は於久保田諸事御用取扱交代可相勤候、御扱如賞罰之儀は兩人え被相任候事

一、御百性收納之外、郷中諸懸り物ハ前段之通何程と申限り無之故、困窮ニ相成候

仍て取立方諸失墜相省、役所え御物成・小役銀・五斗米代銀相納メ、直々役所より運送、諸向上納致候様積物を以取立候ハ是迄御百性手内にて上納致候より格別之勝手ニ可有之候、積り立候衆相記候所ニ寄り不同可有之候得共、大抵高石石ニ付輕石老石三斗之考、右老石三斗役所え相納候得ハ、收納悉皆相済、其外之諸郷役ハ役所にて相弁候事

但、諸勤進、寺院奉加之儀、是又役所にて取扱吟味之上、御免許之分ハ少分ニも役所より可差出候事

一、耕作之節は不及申、御代官時々村廻り見分致候事

一、公用にて廻在致候者ハ、駅場之外、右役所にて止宿可致、駅場迎も役所有之処ハ役所え止宿可申、若事により外宿等申付候得ハ役所より申渡候事

但、当分役所より賄料宿え可被下候

一、春秋收納為取立、家來等差遣候を右役所え罷越可申候

尤賄可被下候、馬歩夫は賃錢定之通可為指出候、右兩度之外用事有之、家來指遣候へ、於役処留置、一日百文つゝ之賄代可為差出候、用事之儀ハ百姓相控候て、於役所可申談候

一、賄は一汁二菜ニ被定置候事

一、御上下之節并津輕様御往來之節は、御百姓是迄之通歩伝馬為指出候事

一、村々長百姓之内、年番兩人ツゝ立置、其年之収納方諸事御用取扱可申候

附、已前ヨリ仕形有之村々ハ其形御代官え可申達候事

一、役処并蔵之儀ハ早速より建置候事相成間敷候故、暫之内は相并候程之家蔵御借上被成置、余米指考イ候上、役所蔵共建置可申候

仍て役所借シ上料、蔵敷米共御積りを以可被下候

但、蔵三ツ位も御借り上可被成候

一、下筋御物成は阿仁御蔵を始、十二所・大館・檜山・能代御蔵等え最寄にて上納致、能代払も可致候、給分同断

一、宍拔之内、蔵三ヶ処、内式ヶ所川前近キ処、同宍ヶ所役所近処

但、物成取立雪中ニ掛り候節は、村限ニも肝煎郷蔵え納置見斗い、輕又ハ駄送にて三ヶ所之蔵入え入置可申事

一、御郷役物は御定之通代銀御百姓ともえ相渡右品々上納可為致候

一、諸公用之面々、是迄之通御判紙にて罷出候者、相成丈ヶ役所にて止宿宍人宍升御定御物成より引落、外登せ米等之入用ハ役所雜用より相渡候事

一、宍拔限御城下え御蔵本立置銀穀共ニ取纏、御蔵本にて立會請払可致、銀も同所にて掛立同所符にて相并可申事

一、御材木増本米、薪尻打等都て定式収納之外ニ是迄過役ニ出シ來候村々は十三取立之外右出銀高相加取立上納可仕候

一、御鷹餌鳥右同断

一、五節旬ハ一村限り年番之者成り宍人ツゝ役所え見廻可申候、

礼物ハ銀宍勿限り、其余ハ土産等之儀一切可為無用、下役筆取升取之類、穩密ニ礼物等受候ニおゐてハ敵科可申付候

但、年始ハ七日ニ罷越可申候、歳暮見廻不及候、右持參之

礼物にて役所小役人并其外參候者え酒振廻可申候

一、御皆済之儀ハ御代官取纏、悉皆相極御皆済手形御代官引受御百姓え可相渡候

但、品々子細之儀ハ肝煎筆取等にて相并候ても下役取扱之事故、諸失墜相省候事

一、宍拔切年中之惣勘定取纏、七月中見済勘定可指出事

一、納米扱之儀ハ急度吟味可仕候、御百姓限年番世話役之者へ出來之段為知候ハ、是迄之通組頭吟味之上斗り立中札え升取之者名前、符人名前并役所印形入念可申候

一、取立米一村限之印にて舟蔵へ持參致候ハ、買目、升見相改、

下役之者是を受取、役所之印形手形可相渡事

一、其年之取立米納候時日并米高共ニ大抵ニも差考九月始可申出候

二、当高貳万石

此現米四万八千石 但四六之法

内壹万三千貳百石 但貳万石之物成、かん米共ニ

同貳千三百三拾壹石余 減米、蔵敷米、運賃米大凡積リ

同五千百六拾貳石四斗 貳万石之小役銀

貳拾五匁直段積リ

同千三百石

五斗米代運賃、蔵敷共大凡積リ

但銀納之願ハ時相場ニ被相定候間、且是迄之通三ケ度上納

右之外品々諸払積リ立相略ス

一、諸役を始、是迄致来候音信物、土産物、此節より悉皆相止可申候、并吉凶ニ付私之音物詰開共ニ委ク相減省略可仕候、右之段ハ小人躰迄も銘々え申渡、急度可相守候

一、肝煎代リ礼登リ等ニ及不申、并是迄致来候諸役人相見廻音信物等無用之事

一、役処近処出火之節、左之村々より詰人足早速駈付可申候、但其村出火之節ハ詰人足馳付候義ニ及不申候、此段兼て申渡可差置候

一、人足三拾人

大館町

一、同

根下戸村

一、同

片山村

一、同

沼館村

一、同

岩瀬村

一、同

早口村

一、同

山田村

一、百人

右之通支郷共ニ取合、兼て備致、急事之用共ニ可相弁候

右之外、追々被仰渡候次第も有之候得共、此節出来不致、一

先前文之通被仰渡候条、村々町寧ニ可申渡候

委曲演説ニ申渡通ニ候、已上

附、是迄往來之者、公用之面々共ニ馬繼之処并外村々共屋

食、酒等指出候得共、已来急度無用可致候

若其当人望之者有之候ハ、あたへ請取夫丈ケニ可指出候、

国々無用之失墜相掛ケ申間敷候、尤御代官往來村廻リ共ニ

右同断

石山 与 助

浅原 重 太

天明四年

辰九月十二日

大館町

花岡村

二井田村

綴子村

坊沢村

寄郷村々共

肝煎殿

天明六年

御貸米御調帳

午

親郷秋田郡

二井田村

(下関文書 四二一〇五)

一、御貸米御本三拾七石九斗六升五合

二井田村

一、御貸米御本六石六斗式升壹合

赤石村

此俵数百五拾壹俵卜式斗壹升五合

但輕升式斗五升入

此俵数式拾六俵卜壹斗式升壹合

但右同断

一、御利足米五石六斗九升五合

右同村

一、御利足米九斗五升三合

右同村

此俵数式拾式俵卜壹斗九升五合

但右同断

此俵数三俵卜式斗四升三合

但右同断

一、兩廻出目米式石壹斗八升三合

右同村

一、兩廻出目米三斗八升壹合

右同村

此俵数八俵卜壹斗八升三合

但右同断

此俵数壹俵卜壹斗三升壹合

但右同断

一、御貸米御本壹石三斗

下川原村

一、御貸米御本五石三斗六升七合

板沢村

此俵数五俵卜五升

但輕升式斗五升入

此俵数式拾壹俵卜壹斗六升七合

但輕升式斗五升入

一、御利足米壹斗九升五合

右同村

一、御利足米八斗五合

右同村

一、兩廻出目米七升五合

右同村

此俵数三俵卜五升五合

但右同断

一、御貸米御本五石四斗壹升六合

出川村

一、兩廻出目米三斗九合

右同村

此俵数拾七俵卜壹斗六升六合

但右同断

此俵数壹俵卜五升九合

但右同断

一、御利足米六斗六升式合

右同村

一、御貸米御本式石七升五合

小袴村

此俵数式俵卜壹斗六升式合

但右同断

此俵数八俵卜七升五合

但右同断

一、兩廻出目米式斗五升四合

右同村

一、御利足米三斗壹升壹合

右同村

此俵数壹俵卜四合

但右同断

此俵数壹俵卜六升壹合

但右同断

一、御貸米御本拾式石壹斗五升六合

櫃崎村

一、兩廻出目米壹斗壹升九合

右同村

此俵数四拾八俵卜壹斗五升六合

但輕升式斗五升入

一、御貸米御本壹石壹斗三升八合

大披村

一、御利足米壹石八斗式升三合

右同村

此俵数四俵卜壹斗三升八合

但輕升式斗五升入

此俵数七俵卜七升三合

但右同断

一、御利足米壹斗七升壹合

右同村

一、兩廻出目米六斗九升九合

右同村

一、兩廻出目米六升五合

右同村

此俵数式俵卜壹斗九升九合

但右同断

一、御貸米御本五石壹斗五升七合

大子内村

此俵数式拾俵卜壹斗五升七合

但右同断

一、御利足米七斗七升四合

右同村

此俵数三俵卜式升四合

但右同断

一、兩廻出目米式斗九升七合

右同村

此俵数壹俵卜四升七合

但右同断

一、御貸米御本四石八斗式升

杉沢村

此俵数拾九俵卜七升

但輕升式斗五升入

一、御利足米七斗式升三合

右同村

此俵数式俵卜式斗式升三合

但右同断

一、兩廻出目米式斗七升七合

右同村

此俵数壹俵卜式升七合

但右同断

一、御貸米御本五石六斗六升六合

本宮村

此俵数式拾式俵卜壹斗六升六合

但右同断

一、御利足米八斗五升

右同村

此俵数三俵卜壹斗

但右同断

一、兩廻出目米三斗式升六合

右同村

此俵数壹俵卜七升六合

但右同断

一、御貸米御本五石六斗九升八合

前田村

此俵数式拾式俵卜壹斗九升八合

但輕升式斗五升入

一、御利足米八斗五升五合

右同村

此俵数三俵卜壹斗五合

但右同断

一、兩廻出目米三斗式升八合

右同村

此俵数壹俵卜七升八合

但右同断

惣御貸米御本九拾式石三斗七升九合

此俵数三百六拾九俵卜壹斗式升九合

御利足米八拾三石八斗五升七合

此俵数五拾五俵卜壹斗七合

兩廻出目米八五石三斗壹升三合

此俵数式拾壹俵卜六升三合

右米三口合百拾壹石五斗四升九合

此俵数四百四拾六俵卜四升九合

但輕升式斗五升入

右之通御見分相濟申候、以上

二井田村肝煎

平左衛門

前田村肝煎

与四右衛門(印)

本宮村肝煎

伊左衛門

天明六年午

天明七年

荒地
休
高
書
上
帳

未四月

(一関文書 四一八一七)

二当高五石七斗九升老合 御蔵入高 二井田村

此分今年起立被仰付御受申上候

右は巳年より未年迄三ヶ年休高御調、片庭久兵衛殿今年迄休
高ニ御座候、仍而書付指上申候、以上

天明七年未四月

二井田村肝煎

平左衛門

同村長百姓

惣右衛門

同

三之助

(表紙)

天保五年

秋田郡南比内二井田村 御毛引并ニ 書上帳
荒地休高

午十一年

(注、前のに引続いて綴られている)

御蔵分

見高貳百貳拾七石八斗九升壹合

一、引高七拾七石壹斗貳升六合 免四ツ貳步成り

此当高六拾壹石七斗壹合

見高四拾九石四斗四合

一、同高拾三石七斗貳升七合 同四ツ三步成り

此当高九石八斗三升八合

見高三拾七石九升壹合

一、同高拾壹石四斗三升三合 同三ツ八步成り

此当高七石貳斗四升壹合

当高合七拾八石七斗八升

指上高毛引

見高拾壹石四斗六升三合

一、高六石四斗壹升五合 免四ツ八步成り

此当高四石六升三合

外ニ御郡方ニは御毛引無御座候

当午年荒地地休高

一、当高貳斗五合 御下帳御蔵分

一作荒引継願

一、同高貳石壹斗七升四合

寛政六寅御帳

一、同高七斗貳升五合

御蔵分右同断

一、同高七斗貳升五合

文政七申ノ御帳

一、同高七斗貳升五合

御備高御蔵分

一、同高七斗貳升五合

右同断

一、同高七斗貳升五合

御備高

一、同高七斗貳升五合

天保貳卯ノ御帳

一、同高七斗貳升五合

一作荒

一、同高七斗貳升五合

郷中辛勞免之内

一、同高七斗貳升五合

市五郎辛勞免高之内

同壹石壹斗壹合

清左衛門右同断

一、同高四石九斗三升四合

御本家高

一、同高四石九斗三升四合

御本帳畠高荒地ニ成ル

一、同高四石九斗三升四合

右同断

一、同高四石九斗三升四合

右同断田高

一、同高四石九斗三升四合

上リ御蔵分

一、同高四石九斗三升四合

右同断

一、当高三石四斗四升五合

天保卯ノ御帳

一、当高三石四斗四升五合

御備高荒地地休

内八合

御蔵分

同老石四斗七升三合

市五郎辛勞免高

同八斗九升式合

清左衛門右同断

同老石七升式合

郷中右同断

一、同高五石式升九合

文政五ノ御帳

御備高荒地

内老石式升三合

御蔵分

同五斗四升三合

重兵衛江辛勞免被下候分

同老石式斗六升四合

清左衛門右同断

同式石老斗五升九合

郷中右同断

一、当高八石九斗三升老合

天保四卯御帳

御備高一作荒

内老石四斗四升三合

御蔵分

同三石三斗六升

市五郎ニ辛勞免被下候内

同老石五斗五升

清左衛門右同断

同式石老斗七升八合

郷中右同断

惣当高合三拾四石七斗老升九合

右之通り書上相違無御座候、以上

二井田村肝煎

一関 重太郎(印)

天保五年午十一月

熊谷 環 殿

天明三年

南比内村々飢人御救米引配帳

卯十一月

但指上米物成之内を以

知十二月二日

一、米式石卷合

赤石村より

御救米指上米より受取筈

此輕升式石式斗卷合

同

一、三石卷升八合

出川村

右同断

此輕升三石三斗式升

同

一、三石

本宮村

此輕升三石三斗

同

一、輕升五斗

歌之助

同

一、同卷石七斗五升

七左衛門

同

一、同七斗五升

七十郎

右、拾卷石八斗式升

大葛村

一、米拾卷石四斗六升

内式石

錢にて被下候分

同九石四斗六升

此本廻り八石六斗

味喰内村

一、同式石七斗

内式斗五升

錢にて被下候分

同式石四斗五升

此本廻り式石式斗式升七合

大卷村

谷地中村

一、米三石五斗七升

内七斗五升

錢にて被下候分

同式石八斗式升

此本廻り式石五斗六升四合

白沢水沢村

一、同卷石五斗六升

此本廻り卷石四斗卷升八合

小坪沢村

一、同八斗四斗

此本廻り七斗六升四合

大披村

一、同六斗三升

此本廻り五斗七升三合

村方指上米

櫃崎村

一、米三石四斗五合

内巻石五斗

同巻石九斗五升

錢にて被下候分

板沢村

一、同式石式斗八升

内七斗五升

同巻石五斗三升

錢にて被下候分

赤石村

一、同巻石四斗巻升

内式斗五升

同巻石巻斗六升

錢にて被下候分

出川村

一、同式石巻斗

内五斗

同巻石六斗

錢にて被下候分

小袴村

一、米七斗八升

此本廻り七斗九合

村方指上米にて

大子内村

一、同四斗五升

此本廻り巻石五升五合

此本廻り巻石四斗五升四合

村方指上

此本廻り四斗九合

村方より指上米

沢尻村

一、同巻石五斗

内式斗五升

錢にて被下候分

下川原村

一、同七斗式升

村方指上米より

同巻石式斗五升

此本廻り巻石斗三升六合

十二所村

一、米九石五斗七升

内巻石五斗

錢にて被下候分

一、同式石四升

内七斗五升

錢にて被下候分

同八石七升

此本廻り八石三斗三升六合

同巻石式斗九合

此本廻り巻石斗七升三合

道目木村

一、同巻石式斗六升

内式斗五升

錢にて被下候分

猿間村

一、米巻石式斗六升

内式斗五升

錢にて被下候分

同巻石巻升

此本廻り九斗巻升八合

同巻石巻升

此本廻り九斗巻升八合

輕井沢村

一、同式石四升

内七斗五升

錢ニテ被下候分

同式石式斗九升

此本廻り石斗七升三合

曲田村

一、同式石斗四升

内式斗五升

錢ニテ被下候分

同八斗九升

此本廻り八斗九合

外式合村々切除分

本廻り三拾七石五升五合

天保四年

二井田村支郷共人別書上控

癸巳拾月

(二) 関文書 四一九四二

一、惣人数合千三百七人

内六百八拾四人

内拾八人

同百三拾八人

同五百式拾人

同六百式拾三人

内式拾式人

同百式拾九人

同四百七拾式人

二、井田村

男

七拾歳以上

拾歳以下

七拾歳以下

女

七拾歳以上

拾歳以下

七拾歳以下

一、惣人数合七百三拾人

内三百七拾八人

内拾五人

同九拾三人

同式百七拾人

同三百五拾式人

内十人

同式百六拾人

同八拾式人

榎崎村

男

七拾歳以上

拾歳以下

七拾歳以下

女

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

内三人

同七拾九人

同式拾式人

同九拾六人

内式人

同七拾人

同式拾四人

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

女

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

一、惣人数合三百八拾式人

内百百拾九人

内八人

同百六拾人

同五拾壹人

同百六拾三人

内六人

同百式拾七人

同三拾人

板沢村

男

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

女

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

一、惣人数合百五拾壹人

内五人

内三人

内式人

小袴村

七拾歳以上

男

女

一、惣人数合式百人

内百四人

赤石村

男

同百六人

内六拾人

同四拾六人

同四拾人

内拾九人

同貳拾老人

一、惣人数合貳百拾六人

内百貳拾貳人

内四人

同九拾七人

同貳拾老人

同九拾四人

内貳人

同八拾貳人

同拾人

一、惣人数合百拾六人

内七拾老人

内四人

同四拾四人

同貳拾三人

同四拾五人

七拾歳以下

男

女

拾歳以下

男

女

出川村

男

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

女

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

大披村

男

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

女

内貳人

同三拾三人

同十人

一、惣人数合百五拾九人

内八拾三人

内四人

同六拾老人

同拾八人

同七拾六人

内三人

同五拾五人

同拾八人

一、惣人数合百三拾老人

内七拾人

内三人

同貳拾六人

同四拾老人

同六拾老人

内三人

同拾七人

七拾歳以上

七拾歳以下

十歳以下

大子内村

男

七拾歳以上

七拾歳以下

十歳以下

女

七拾歳以上

七拾歳以下

拾歳以下

杉沢村

男

七拾歳以上

拾歳以下

七拾歳以下

女

七拾歳以上

拾歳以下

同四拾老人

七拾歳以下

一、惣人数合百八拾老人

前田村

内九拾五人

男

内老人

七拾歳以上

同三拾三人

十歳以下

同七拾老人

七拾歳以下

同八拾六人

女

内式人

七拾歳以上

同式拾式人

拾歳以下

同六拾式人

七拾歳以下

一、惣人数合百八拾式人

本宮村

内九拾六人

男

内式人

七拾歳以上

同六拾四人

七拾歳以下

同三拾人

拾歳以下

同八拾六人

女

内五人

七拾歳以上

同五拾七人

七拾歳以下

同式拾四人

拾歳以下

一、惣人数合八拾老人

下川原村

内四拾九人

男

内四人

七拾歳以上

同三拾六人

七拾歳以下

同九人

拾歳以下

同三拾式人

女

内式人

七拾歳以上

同式拾五人

七拾歳以下

同五人

十歳以下

一、惣人数合百九人

寺崎村

内五拾人

男

内老人

七拾歳以上

同五人

十歳以下

同四拾四人

七拾歳以下

同五拾九人

女

内三人

七拾歳以上

同拾七人

十歳以下

同三拾九人

七拾歳以下

覚

一、惣人数三千九百四拾五人

二、井田村寄郷共

内式千百三人

男

内七拾人

七拾歳已上

同千五百五十五人

七拾歳已下

同四百七十八人

拾歳已下

同千八百四十式人

女

内六拾四人

七拾歳以上

同千三百六十九人

七拾歳已下

同四百九人

拾歳已下

右之通ニ御座候、以上

二井田肝煎

一 関 重太郎

天保四年癸巳十月

熊谷 環 殿

右之通り当時右人教書上候様被仰付、具申上候

外ニ寺院・修験人別帳ハ別冊ニ致候て差上申候、以上

癸巳十卷月七日、釈迦内村へ歩夫を以仕送仕候、以上

去年中作並不宜ニ付、米高直ニ相成候所、当作之儀は幾年ニも無之絶作同様非常之凶作ニ付、在之通被仰渡候

一 粥雑飯可相用事

但分限ニ寄、粥雑飯不相用ものも可有之候得とも、厳

ニ申会、粥雑飯可相用候

一 重き法事といへとも、一朝に可限事

一 諸祝儀、兼て被仰渡候得共、猶更手輕ニ可致事

一 親類懇意吉凶ニ付、音信物聊たりとも可為無用事

一 家作諸普請致度ものも、此御時節柄を奉存、思慮仕居候

ものも可有之、米高直ニ付、小間居のもの手間無之、

益及窮迫候間、不及思慮、勝手ニ諸普請可致事

一 酒造并濁酒手造とも、当分被相禁候儀、先達被仰渡置候

所、弥以被相禁候事

一 詐類并粉さき漬被停止候

一 温純素麵拵候儀、被相禁候

一 惣して米麦等を以拵候菓子類、其外鉛玉、やきこふれん

に至迄、被相禁候

但、餅類売買致候儀は、可為勝手事

一 染もの、紋付之外、形付類一切染申間敷事

一 諸色高価之所、貪利之姦商とも、虚ニ乘し、非常之高価

ニ売買致候ものも有之様相間得、不屈之至候

依之御吟味之上、右之もの於有之は、嚴重之御料可被仰付候

一 火之本要心之儀は兼て被仰渡候通、町内申会、猶更無油

断可遂吟味候事

右之趣、町々役々え被仰渡候

已九月十八日

年寄衆え

御直書を以被仰出候御書附之写

年寄共え

去年中より不作、別て今年は不熟にて六郡絶作同様之趣相聞得、領民とも餓死ニ相及候ものも可有之哉、心痛之至候

是迄向々夫々手当致候儀にも可有之候へとも、万一行届兼、

在々小百姓ニ至迄老人たりとも餓死之もの有之候ては、我等、

從御先代承統之国家取扱保之御本志可相立、且隣国え相聞得候て

も耻辱之至候、依之、如何躰之練会を以成とも、救不申候得は、

難相成候間、此節を存何も精々心を摧き、一和致、相互ニ救合、

此旨趣末々之ものニ至迄行届候様存候、勿論手本一身之義は何

程も艱難相忍可申候間、無思慮取調可申候候、且又從御先代御

讓之品々、武器之外、縦、重器たりとも手放候儀不苦候間、此

本志ニ基、当時之危急相救候様ニ可取斗候、此旨向々役人共え

篤可被申合候事

已九月十五日被候出候なり

右被仰出書え、年寄衆より被差添候

御別紙左之通

今般別紙之通御直書を以御書附被仰出候御仁恵之程重疊難有
奉恐擢候

此旨篤被相心得、何事も一和致、有無相通、互ニ相救御為第一
一心厚思召之御趣旨相立候様可被致事

九月十九日

年寄衆より、御側廻より御勘定奉行

并御副役迄口演書

今般御直書を以被仰出候は、去年中より不作、別て今年は不
熟ニて六郡絶作同様之趣被問召、御領民餓死に及候ものも可有
之哉と、御心痛被成置、是迄向々夫々手当致候義ニ可有之、被
思召候得とも、万一行届兼、在々小百姓ニ至迄一人たりとも餓
死のもの有之候ては、從御先代様御承統之御国家取保之御本志
不被為立、且隣国え相聞得候ては、御卑辱被思召、依之如何躰
之御縁合被成ても御救不被成置候得は難被為成思召候付、此節
を奉存孰も精々心を推き、一和致、相互ニ救合、此御旨趣末々
之ものニ至迄行届候様被思召候、勿論、御手本御一身之儀は何
程も御艱難可被為忍候間、無思慮取調申出候様、且又、從御先
代様御讓之品々御武器之外縦御重器たりとも御手放之儀不苦思
召候間、右御本志ニ奉基、当時之危急相救候様、篤可申合候段

被仰出候、右之通深く御心痛御配意被為在候儀、拙者ともニも
恐怖至極奉存候間、右被仰出之筋、聊も不取失、一和致、互ニ
不残心底評義相竭、危急之義可被取計候

別て郡奉行町奉行之義ハ、数万之御領民被預置候事ニて、行
届兼候向も可有之候へ共、御領民ハ一体之義ニて、何れより餓
死のもの出候てハ、御本志不相立候間、厚勘弁被相加、互助合
不平之儀無之様手当致、思召之御趣意相立候儀專一ニ可被心懸
候、右之條々各属役共えも不洩様篤可被申合候、猶御直書相渡
候間、拜見可被致候事

右之趣同役中え可被相伝候

九月

右執達共能代奉行御勘定奉行

御評定奉行町奉行御副役一人宛御呼出ニて於御政務所被相
渡候、但、郡奉行病氣ニて不罷出候

尔時文保四年已九月十五日

九月十六日左之通被

仰出候趣、御用人太繩新左衛門御書附写

御繁鷹都合拾五据之内、御時節柄別段之以思召、当分七据被
減置、其餘は御返し可致之旨被仰出候間、右之趣御鷹役共え可
被申渡候

右之趣御刀番三人部屋え才足申渡候

御不斷御召服御袴とも定式御召替之御規律も被為有候得とも、御時節柄ニ付別段之以思召、当分惣て御常度に不被遊御拘、御垢付等之儀は可被成丈御勘忍、御召替可被遊之形被仰出候間、右之心得を以、御召替可被差上候。

一 此度思食之旨、御直書を以被仰出有之候、依て拜見被仰付候、扱今年中より之不作、今年は別て凶作にて六郡絶作同様之事と相聞候得は、飢饉のもの又はいかなる御苦柄可相生哉、兼て被仰知候通之御勝手向候得は、御救等之御手当も無之、既二年中御行届之程も難斗、右ニ付、御買米御調達御用被仰付、御勘定奉行とも兩都え差登候得とも、洪太之御調達銀ニ有之、兩都とも御借財十分御借塞の上、当春も親類御調達被相頼候後候得は、相并候程如何有之哉、更ニ見居も無之、假令兩様之御用向無欠相并候とも、危急之御時節候得は萬一御前金をはしめ、御指支之儀無之とは決て難申、御大事之御場合ニ相迫恐入候次第候、御領民御救之義、深く被遊御苦勞候より御手本御一身之御事すら何程も御艱難可被為相忍、無思慮取調申出候様、其上御重器たりとも御手放可被成置、篤思召之趣難有御儀、拙者共ニも至極恐入奉存候、右之御本志ニ奉基、臨時格外之取調も可有之、諸向御減少ニも可相宥と存候義、前条之通ニ候得とも、右之外ニも減少之向可有之候、互ニ不殘心底評義被相尽候様致度、此

旨屬役とも并其筋えも不洩様、嚴被申含、早取調可申出事

別紙

- 一 御召服之類、惣して御減少之事
 - 一 御納戸向御手本御用を始、諸事御差略御取締之事
 - 一 御台所向臨時別段御省略之事
 - 一 御繁鷹數、近年御定數より御減少之事
 - 一 御立馬同断之事
 - 一 御參觀御供、明年ニ限臨時格別ニ御差略 御減少之事
- 已九月十八日被仰渡候次第
- 一 此度御吟味之次第有之、御領中正有人御取調被成置候間、町々は老町役取纏、支配有之向々は於支配取纏致帳面当月晦日迄御評定所え可被差出候
- 但七拾歳以上拾歳以下男女書分可申候、輕輩并百姓町人名前年齢とも老人きり書分可申候、若得心かたき義も候ハ、同所え可被伺候事

天保四癸巳年記録

(国立史料館、一関文書
四二九〇一号)

一、人数御調米御差積之事

一、湊能代より運送之事

一、饑人乞食之事

一、時疫流行御施業之事

一、糧食物之事

一、凶作備之事

一、預通用之事

一、諸色相馬変化之事

一、奢侈之事

米穀御差積之事并惣人別

天保四年癸巳十一月御領内惣人数調

一、壹万四千四百拾七人

御一門より諸士迄

一、壹万六千拾五人

役附近進並輕糞共、并ニ久保田町・

湊町・能代町人共ニ

一、七百八拾六人

長屋借

一、貳万八千貳百九拾八人

一、貳千八百卅八人

小鷹狩右近組下給人足輕共

一、四千六百卅八人

角館・蒔和野右同断

一、千百拾貳人

檜山右同断

一、三千四百七拾八人

大館・十二処右同断

一、千四百五十八人

在々長屋借

屋敷借共ニ

一、千四百拾貳人

久保田并ニ在々寺院・修験・社人・

門前共ニ

一、壹万四千九百貳拾五人

一、三万九千三百五人

雄勝郡

一、貳万四千七百廿四人

川辺郡

一、五万七千七百卅八人

平鹿郡

一、四万七千八百七十六人

山本郡

一、八万五千七百七十七人

仙北郡

一、拾貳万六拾壹人

秋田郡

一、三拾六万九千七百八拾壹人

一、三百五拾六人

籠山

一、貳百四拾六人

矢櫃山

一、五百六拾六人

大葛山

一、五千五百六十壹人

阿仁銅山四ヶ処

一、六拾八人

向銀山

一、貳千三百十四人

院内銀山

一、百七十九人

八森銀山

一、九百貳十五人

諸山

一、壹万貳百拾六人

惣人数合四拾貳万貳千九百貳拾人

此飯料一日千三百五石七斗八升五合

一日壹人ニ付三合積之考

右之通本書ニ在之候得共、右人数え三合かけ候得は壹日

ニ千貳百六拾八石七斗六升ニ候、何ノ間違ケ不分

巳ノ十月より午九月迄十ヶ月、日数三百日飯料積リ

別紙覚

一、三拾九万千七百三拾五石五斗八升

一、拾五万石 米雜穀御買入見込石高

右之通本書ニ在之候得共、三拾八万六百貳拾八石ニ当ル、

内八万八千石余 大坂・加賀・富山・越后・飛嶋并ニ当表

間違前ニ記候通

ニテ御買入米、麦、豆石高大凡

内七万千六百三拾貳石

残六万千七百石余 右ハ御不足、追々御買入可被成置分

右ハ御蔵入差上給分共ニ高拾壹万石之輕升

一、金壹万千八百兩余 大坂ニテ米雜穀諸品共凡五万九千九百石

同廿壹万四千八百九拾六石

右ハ百姓作徳米

同壹万石

麦有数之考

一、六万千百兩余 越后ニテ米雜穀共ニ貳万千貳百石余并ニ

同壹万石

沖入米之考

諸品御買入代

同壹万石

右ハ出米有数、越后御買

一、貳千九百兩余 江戸より諸品御下之代

一、三拾壹万六千五百貳拾八石

入共ニ考

一、四千六百兩余 飛嶋并ニ当表ニテ米雜石貳千百石余御買

残七万五千貳百七石八斗

不足

外ニ 一、拾八万四百兩御払相濟候分

此補

外ニ

五万石

大坂御下米

六万六千百兩余

千石

富山米

給分御扶持分方并ニ余米代正御払不足分

壹万石

大豆其外雜穀ニテ補ハ

拾万七千三百兩余

又残壹万四千貳百石余

又不足

御不足米六万千七百石余、追々御買入代金、此節御手

已十二月写置

又不足

当無之分

右之通ニ候得ハ九万石余之御買入米と相見候得共、午五月御

又不足

以上

直書被仰渡之節別紙を以被仰知候御書付左ニ

右ハ午五月、御直書被仰渡之節被仰知候御書附之写し

旧冬御差積七万石余御不足と在之処、此御取調拾五万石

旧冬御差積七万石余御不足と在之処、此御取調拾五万石

御見込と在之候

旧冬御差積物成米并二百性作徳米合廿八万石余也、左程ニ

ハ出申間敷、大ニ御見込違ひと相見得候

秋田郡南北比内村々御廻米願纏一紙

一、惣人数貳万九千貳百九拾老人

内八百三拾四人 右は三歳以下相除ク

同四千六百六拾三人

右ハ去冬中より御救米尅日老人ニ付尅合

宛被下置候内、御田畑仍致候者、四月よ

り相除、残手間稼も相成兼候もの秋中迄

御救願人別

同貳千拾三人

右ハ村々御扶持拜領之者并ニ余米御返被

下置、其外雜穀等ヲ以秋中迄如何様共取

続御苦柄不申上候人別

同八百貳人

右ハ十二処町惣人別、同町肝煎吹谷和右

衛門取扱被仰付、秋中迄御苦柄不申上候

人別

同百貳拾老人

右ハ猿間村余米并糶品を以一村通合秋中迄

迄御苦可被不申上候人別

同貳百廿四人

右ハ大茂内村右同断

同貳百四拾貳人 右ハ商人留村右同断

合八千八百九拾人

残貳万三百九拾貳人

此飯料八千五百三拾石五斗貳升四合

外ニ

八百六拾六石三斗七升尅合

極窮人四千六百六拾三人、一日尅人尅合

宛御救願

同四拾五石五斗三升五合

右ハ駅場村々御伝馬歩夫相勤候もの飯料

并ニ旅人賄米共ニ御払願

惣米合 九千四百四拾貳石四斗三升

内八拾六石四升八合 二月分

内四拾五石尅斗七升三合

代錢上納相成兼、追て返上願

同四拾石八斗七升五合

御扱願

同三百拾貳石四升八合

三月分

内百八拾三石四斗九合

拜借願

同百三拾尅石六斗四升尅合

御救願

同千四百五拾四石貳斗三升

四月分

内式百七拾五石六斗四升 則錢上納御払願

同七百三拾三石三斗式升 拝借願

同四百四拾五石式斗七升 御救願

同千五百四拾五石八斗九升 五月分

内式百七拾七石壹斗四升 則錢ニテ御払米

同八百廿三石四斗八升 拝借願

同四百四拾五石式斗七升 御救米

同千五百八拾九石九斗四合 六月分

内式百八拾七石壹斗九升 則錢上納御払願

同八百五十七石四斗四升 拝借願

同四百四十五石式斗七升 御救願

同千六百三拾五石七斗五升 七月分

内式百九十八石三斗六升五合 御払願

同八百九十式石壹斗式升三合 拝借願

同四百四十五石式斗七升 御救願

同千六百五拾壹石四斗三升壹合 八月分

内三百七石五斗壹升五合 御払願

同八百九十八石六斗四升八合 拝借願

同四百四十五石式斗七升 御救願

同千六百六拾七石壹斗壹升壹合 九月分

内式百六十五石五斗七升五合 御払願

同五百九十式石六斗式合 拝借願

同三百八石九斗三升四合 御救願

以上

天保五年甲午三月

米千式百式拾三石六斗壹升六合

右は村々余米御引上不足之ものえ通し合候分、四月

より九月まで月々御返し付分

内三百四拾九石壹斗五升式合 四月御返分

同式百五拾七石四斗八升五合 五月分

同式百拾三石四斗七升九合 六月分

同百六拾七石六斗式升五合 七月分

同百五拾壹石九斗五升 八月分

同八拾三石九斗式升五合 九月分

以上

南比内御勘定帳尻

一 米千五百九拾貳石八斗九升六合三夕

御渡米并ニ能代より御買入分共ニ

一 百四拾六石三升四合四夕

十二処・扇田・二井田にて御買上米

合千七百三拾八石九斗三升七夕

内百四拾八石四斗貳升六合 窮民御救米

同六拾五石九斗四升五合

御廻米已前村々余米御借上
御救米

ノ貳百拾四石三斗七升壹合

同四百貳拾五石壹斗四升八合

村々拝借被仰付候分

同百拾八石八斗三合

御廻米已前余米小壳仕候分

百十七文替

同壹石八斗壹合 小壳米

代三十貫六百拾七文 百七拾文替

百六十文替

同貳石五斗 代四貫文

百四十文替

同四百四十五石九斗壹升三合

百貳十文

同五石六斗五升 代六百六十七貫八百卅六文

百文

同百七拾四石壹斗七升 代千七百四拾壹貫七百五文

八拾文

同八石八斗四升 代七十貫七百八十八文

小壳米

七筆合

同百貳拾九石四斗六升九合 湊・能代運送へり米

同四十八石四斗八升五合 一番・貳番共種粳出米

同拾九石九斗貳升六合 御扶持御渡米

同拾四石八斗貳合 船乗飯米、鷹巢、板沢詰合

上乘飯米共

同六拾六石七斗五升貳合 ヲカ田船破舟流失、二井田

村御賄米、拝借、味之糍米

御用立米御返品々

同六拾貳石七斗七升五合 残有米

以上

麦豆粟空豆合八百四拾壹石四斗七升五合四夕

雜穀平均 内四拾壹石九斗六升貳合 御救ニ被下候分

百人ニ御払 同四百七石式斗七升八合 拜借

同式百五拾七石九斗壹升式合 御払

同式拾貳石五斗七升 種麦拜借并ニ河ッはりぬ

れ豆、味噌煮

同卅八石式斗六升 運送減

同七拾三石四斗九升三合 残有雜穀

一、味噌貳百拾貳目 御渡

内百八十四貫七百目 御救ニ被下候分

同廿五貫三百目 へり

一、昆布貳千三拾九貫八百目 御救

内千六百六拾貫七百六十目 へり

同六十三貫貳百四十目 残有

残三百九貫八百目

一、鳥賊八千三百七拾枚

一、酒糟五拾八貫四百拾五匁

一、和布粉五石 十二廻町重太郎献上分

内貳石 御救ニ被下分、へり共

残三石 残有

米雜穀御払代合老万貳千九百八拾貫三百七拾四文

内八千九百四十四貫百拾五文 上納

同式百拾七貫三百四拾文

船乘飯米代より運賃え差引ニ立分

残三千八百拾九貫九百拾九文 村々不納

北比内御勘定之大略

一、米千八百九拾五石四斗五升式合 御渡米、御買入共ニ

一、雜穀八百八拾貳石壹斗三升式合 豆、麦、空豆、粟、ふす

ま共

一、味噌三百六拾四貫三百六拾目

一、野老拾三石七斗五升

一、和布子九石式斗

十太郎献上分并御買入共

一、鳥賊五千六百五十八枚

一、酒粕六樽

一、昆布千五百五拾三貫貳百目

惣御払代錢老万六千七百卅九貫六十五文

内老万貳千八百九拾壹貫八百拾七文 上納

残三千八百四拾七貫貳百四十八文 村々不納

右南北共天保五年十二月御勘定帳尻

湊・能代より米運送之事

元来去辰年不作、米不足にて巳ノ春より小売米相払候場合少
へ巳年氣候不宜ニ付世上騒敷、売米出不申、巳ノ六七月頃より
大館町にて仙北米買入運送、追々山本郡阿仁・比内え夥敷運送
一、湊より新敷村え駄送、夫より瀧廻し川尻村、大口村両処之内
え着、夫より駄送ニ而能代蔵宿え上川船にて運送、巳九月相
場御定ニ付、運送入目出方無之ニ付、其段申上候処、諸かゝ
り精細取調申上候様被仰付、大館町肝煎石田宗四郎立会之上
同処米世話方岩沢多治兵衛取合之上書上左之通

覚

一、米三斗入 粍俵

内式升五合位

運送中処々積替之減米并ニ小斗リ減共差

積如斯

残式斗式升五合

正米

但シ五升之違有書様ニ可有之、本書之通相記候

此諸かゝり中考

一、式拾文 湊にて蔵敷

一、拾文 同処中買口銭

一、式十文 同処蔵出運賃

一、五十三文 繩藁造りせん共ニ

一、五十文 湊より新敷村迄駄せん

一、四十文 新敷村より川尻村迄瀧廻し運賃

一、五文 新敷宿揚せん

一、五文 川尻同断

一、五十五文 川尻より能代迄駄賃

一、式拾文 能代蔵敷

一、百貳拾文 能代より川船運せん

一、拾文 船場より大館迄駄ちん

一、九拾文位 右ハ湊表え米買諸遣旅籠代、才料上乘悉皆諸
入方差積り如斯

一、四百九十八文

天保四年巳九月

午之春ニ相成、山本郡五十目・阿仁・比内へ之運送日々増太

之事ゆへ、湊表人馬手支近村より駄賃付数百人相集通送致候

扱右ニ付、湊、大久保近村之駄賃付共大ニ僥倖を得候、荷才

料御足輕附添候へ共、少の隙に米盜候事奇妙也

さしの本え袋を付たるを馬に附、毎日俵えさして盜取、甚し

きハ途中え米をこほし砂ニテ隠し置、後粉おろしにておろし候

て米を撰候よし、色々の手段あり、中々以制方ニ相成不申、右

ニ付米を樽詰にて送り出候処、又其樽ニも徒有之、石或ハ土な

と入候事度々有之、樽之糞粉失致候も有之由

一、上乘付候てハ、船中にて減不少、是ハ畢竟船之者徒と相見得

候

一、右運送手配郡方御足輕御手不足ニ付、御武頭組より御借人恒八、大館町多治兵衛、赤石村孫太郎、右三人は春より始終湊表詰合蔵宿本間多左衛門、石野や勘助式軒也

湊より能代迄之間運送之節ハ御借人にて御足輕才料ニ附添川尻村、大口村ニハ大館町嘉右衛門能代より通ひ罷越取扱致候能代ニも南北より式三人詰合、其外部方御足輕夫々上乘才料等致候

一、能代え着岸之御廻米も在之、同処ニても御渡ニ相成候へ共、五六月ニ相成、水枯ニ相成、且川船不足ニて登せ米尺取不申、船積ニ相成候て、十日も日数かゝり不申候得ハ板沢迄登り不申、右ニ付騰巢え中宿を取、夫より小船ニて積登せ候手配もいたし候

是以小船不足ニ付処々之渡し舟ニて取運申候
是ハ七石已下五石、三石外積候事不相成、甚タ差支、明日之小売米も無之、急段板沢より運送、彼是勞煩也、三日共米切候ハ、下地疲果候人也、將其所倒シニ可相成、誠ニ危事共なり

板沢より之駄送も毎日歩行候様子仕なる馬ハ十八疋ならて扇田に無之趣、其頃同処肝煎平右衛門申事也
右運送かゝり莫太之入方ニ付、出方難渋いたし、拜借致、并に小売米代上納不致代銭元立より湊・能代え仕送間ニ合せ申候

右諸入方村々割合之分も有之候得共、多くハ御冥加献上等ニて御償ひ被下候筈、誠ニ以難有事共也

饑人乞食

凶作騒ニ付、已八月津輕より夥數離散之者有之処、御返ニ相成候、右御返礼ニ御使者参候、最初津輕表殊之外騒數相聞得候処、追々静ニ相成候
御家老始御役人、御取扱殊之外宜、公儀代之風説あり
表御首尾ニて御賞ニ御任官被遊候との風説也

最初と事変たる御振合、却て津輕米沢山御領え越申候、正錢百七八十文にて参候

御国者不少津輕え越御施行小屋え入、御取扱ニ相成候申相聞得候ニ付、役人被成大館長百姓長井伊左衛門、午ノ式月御召返しニ相成候者八拾人余、右人数之内十二所出之由ニて壱人御渡ニ相成候ニ付、段々吟味致候処、十二処とハ偽ニて南部赤沢銅山之者之由、親類、近付も慥ニ有之ニ付、南部え送り遣候、早口村之者多分有之由相聞得候

一、上野村、牛嶋村追回三ヶ処え已之年内より御施行小屋被建置、飢人御取扱小屋所二千人余居候由、病氣之ものニハ御施薬被下、久保田富家之者年忌御中法事精進日等ニハ夫々施行も有之由

一、当処ニハ乞食ニ出候もの無之候得共、他郷より入込候乞食、

午ノ五六月頃至て夥敷、五月廿四日粥施行致候節、三十八人
迄算ひ候、左候得ハ五十人余も可在之ヤ

一、坊沢村三百軒余之処、八十軒程ニ成候由、大館新丁式百軒余
之処式三軒も残候や、下夕町川原え餓死人葬候に大穴式つ埋
り候由、尤諸方寄集り乞食ニも可有之候得共、莫太也

一、午式月廿九日、御足輕多七郎屋敷ニ倒死之者在之、御館より
御檢使被仰付、御見分之処疵害等も無之、何万之者共不相知
候ニ付、最寄寺院え申出、仮葬致候様被仰付候ニ付、何れ郡
方え御伺之上ニ仕度申上候処、左候ハハ犬狼之傷損も難計、

番人差出候よふ御申ニ付、受取不申者番人難差出申上候処、
被仰諭有之ニ付申上候、追々御伺致御沙汰を得申度、此度之
儀ハ御館より最寄寺院え被仰付、右取片付候人足差出よふニ
と御座候得ハ、人足之儀ハ差上可申趣申上候処、御聞届にて
長楽寺え被仰付候、人足ハ町方より差出候

取片付候様被仰付候

一、町方担之地方ニ而餓死之者有之候ハハ御檢使願申立や、御伺
申上候処、内々被仰含候ハ、左様之者は夜中町方え引取看病
致候て、病死ニ候ハハ寺院之取扱を以葬候様可致、倒死有之
候ても、右之順ニ可致御内意有之候、午ノ秋迄都合八人倒死
之者有之、寺院之内え布施いたし最寄野間え葬らせ申候

右取扱拘主え申付候、拘主手不足ニ付穴堀人足ハ指出候

一、天明三卯之不作ニハ市中ニ倒餓死人幾人も有之、川え引取扱
候由、死人を見る日も無之との話し伝ひ候

此大凶、左様之事無之、倒死之もの見た事無之と申人稀也、
卯年ニハ御救米・小売米等之御取扱も無之、且其節ハ南部・
津輕至て困り、乞食沢山人込候よし、此度之御取扱之難有を
しるへし

一、已九月十九日夜中、三歳斗之小兒長楽寺之松え結付捨子有之、
近処にて食物呉置候処、仕合と同廿日熊谷環様御諄馬御廻在
伺にて御籠被成、養育致度者有之候ハハ一日苞合五夕、一ケ
月錢式百文宛可被下御意有之、申松願ニ而養育致候

一、已十月四日、独鉆村之支郷庚申塚と申処之女、猿間村え縁付
候所、連系之子共在之、如何様其子供之為離縁ニ相成候や、
家元も困窺と相見得、其子を失ひ候ハハ再縁ニ可相成之取請
を以、三歳斗之小兒を川え捨候ニ付、御役屋にて坂本又右衛
門様御吟味、其女久保田え御登せニ相成候

何と御科被仰付候や、誠ニ以言語同断也

一、子供を乞食いたせさせ、他え縁付候者儘有之、或ハ夫之仙台
江手間取ニ出候他行中、他え縁付候者有之、右等之儀は此度
御差留被成候

時疫流行腫病等之事

已之年内、疫病有之候得共稀也、午ノ式三月頃より流行出候
五月頃ハ大館・扇田辺ハ家毎也、扇田ニ而承候処、中町丁内
ニ五軒外不病もの無之と申程也、煩ひ候もの度々引返し難儀致
候

御国斗リニ無之、南部・津軽・松前共ニ至而流行致候由、全
く食に乏敷者、是に感するにも無之様番小屋に居候扇田出之乞
食傷害ニテ十日余煩ひ、近処もの共水や粥拵与へ置候処、終
快氣致候、衣食に不之、至而達者なるものも此時疫ニ而病死致
候者拳候算へかだし、天道人すくりの時節と相見得候

一、貧親の者穀類乏敷、菜食の為血食色なく、狂たるもの多し、
必秘結を囲む、是にて紫円など用不申して腹痛する者あり、
医家に尋るに煎粉の類乾燥の物を多く食する故に秘結する由
滋潤のものを与ひ、其後不馴を不用候へハ不自由

一、青腫山の者え黒大豆と買聚の根と煮候用ゆれはいゆると云事
あれとも格別の効なし、免角穀食の不足なるにハ困るなり

一、享保十八丑年凶作、諸国時疫流行ニ付、御典医を被仰付、医
書の内より時疫食毒之治法、従公儀被下候法書之内ニ時疫食
毒共ニ黒大豆と耳草煮候用る事相見得候

一、御製葉丸散、極窮之病人え被下候
一、窮民病氣之節ハ従上御薬礼被下候て薬用為致候様被仰付候、
町医進ハ無之ニ付、午二月熊谷環様御廻在之節、御館之御医

者御願被下候、窮民病氣取扱役、長名藤右衛門、金右衛門相
勤候、兩人より医者衆え書付出し薬用致させ候、煮薬凡式十
帖程也

粮食物之事

蕨粉ワケコ 野上の物にハ才一の食物也、七月頃よ
里堀候、七月廿六日出府の砌、今泉辺
より大久保と湊の野間迄、村毎根堀也、
当処ハ八月朔日、二日、大暑の後堀候
由、大豆の粉ニテ用て上品也、惣而の
餅類に受て至極宜し

又蕨の粉斗り久し
く喰へハ目暗し髪
落る、小兒多食ス
レハ肺弱く行事不
能と云

又蕨の粉斗り久し
く喰へハ目暗し髪
落る、小兒多食ス
レハ肺弱く行事不
能と云

民間備荒録ニアリ
根花の外に根米といふものあり、甚木
宜、障りたるものハ不少根花に障られ
たるものハ稀也

葛根
味甘事氣平
わらひの次也、花を取候浸おもとゆふ
もの大ニよろし

性温無毒

備荒録ニ出

草薺

味苦性平

無毒

備荒録

わらひのあもとハ比すへからず、堀出

のあるとは蕨ニ倍ス制法種々いたし候

得とも、才一弁利と申候ハ毛をさり、

右之上ニ置槌にて潰し、其後臼にて搗

策え上て漉又木賊袋えかけ通り候、水

底粉也、策のうへにあるあらきをハ猶

搗たけ袋の内なる袖末と同じく桶え入、

しきりにかき廻し候得ハ、泡か沢山立

也

夫を二三度水をかへ、流し候得ハ苦み

無成る也、泡の不立を交ニす夫を煮事

一返し水を替るほとよく成、斯すれば

灰水を用るに不及、人えも不障と申事

也

又毛をさらは細かに刻ミ、煮て干畜ひ

置、用る時水に浸すこと致へん、又煮

て用るもよし

又生野老を毛をさり、こまかにきさみ

桶え入置、強き灰水漬たるを煮立、右

桶え入、息のとふらぬ様ニ能く蓋をし、

右湯冷候得ハ苦みぬける也、是を策え

取上、能く水にて洗ひ、又灰水にて煮、

柔になり候を又白水かさ水にて煮、又

水にて洗ひ用ゆるもよし、巳之秋頃よ

り斯の通り致たれども手数のかゝる故、

後には此製不流行

煮て能干、白にて搗、皮をとるなり、

其後灰水にて能煮、水にてさわし流す

事度々煮黒き赤水を流す也

又清水にて煮候得ハ柔になり漬るゝ也、

夫を米の粉、麦の粉著麦の粉に和し餅

とするなり

惣て灰水ハ赤螺貝と石決明と灰にし石

灰にし石灰と三味にてあく水を立、野

老したひその類煮候得ハ渋之苦ミ速に

さるなり

石の上置、槌にて碎き、其後白にて

搗能細になりたるを箆え上、灰水にて

漉也、漉こと敷へんすれば皮斗残る也、

箆より通りたるを木めん袋にかけ粉を

取る也

袋に残りたる之物も也、是を清水にて

煮て糲とす、とちの糲式斗五升より粉

五六升、物も式斗位出るなり

味共にしたみに大に勝れり三字あり、

何れか是なるを不知民間荒録、万葉

にて

止知及美と書り、香月牛山翁ノ日倭俗

橡実訓登知非也、山野俗民以此実ノ和

米粉為糲食殺蝨壺小兒宜食性大寒換水

煮拾五次淘毒去蒸熟食流水ニ浸シ一宿

をけは一度煮ても宜橡子実ハ様子也云

欵冬

順和名抄ニ路

トアリ

葉及 味苦付

性温無毒

茉莉

細にきさみ糲にす、能事ハ大根の次なり、平年干蓄るにもよし、葉も灰水に煮て干、水に浸し、又煮て洗ひ流ししほり上細かに刻ミ飯に交てよろし、取分水ふきの葉ハ平年の菜にほろあへ等に大ニよろし

根紫とにる、湯ひきて糲によろし、煎

粉などの色々雑へたる雑粥に入ては諸

物を和し、滑にて好、又車前子を汁に

入てハとろゝの如くかる也

立あさみ下の葉ハ平年の菜也、牛あさ

み、馬あさみハ匂ひ有不宜、能水に而

浸し用るなり

性温無毒味甘風熱ヲサマヌ婦人ノ白赤妖ニ宜ト有

百合 蓬 砂仁 俗ニ山大根ト云 午旁 葉 根葉トモニ

茵陳蒿 商陸 虎杖 カンサノ

右緒草世上にて皆用たる也、害なし

混布

煮て洗ひ上干にて細末にして又煮て根にする也、唯不洗ひ干細末にするもよし、乍去塩気のあるもの故、其汗を用るため煮もよし、冬は火の辺に置から干たる時焙、炉にかけ干て細末とす
試混布七百七拾目、代百五拾四文、此細末老升九合余老升ニ付八拾老文、是を煮て老斗三升あり、細末老升は六升八合四夕ニなる、南部より参候和布の粉と云ハ老升煮て六七升ニ成ル、山野のものとは違ひ煮て殖へ拔堪ありて仿の者には至極よろし、消化させるもの故、唯居人ハ不宜、雑炊共ニ煮、粉或ハ胡ぬかなと多く入たるは渋くして其食にくし、是に根花をとき雑へ候得は食あし、又海羅を入るもよく候、米ふかし飯、豆めし色々ためし候得とも、粥ほど儉徳なるは無之候
糝箕先の類、糠の儘鍋にて煎り細かなる粉をろしにて通し粥にも飯にも用たり

煎米飯

煎米飯

蒸米飯

小麦

大麦

麦安

凶作之年には至て沢山なる物なり、何れの家にて鍋のいたむこと莫太也
煎米を飯に炊候得ハふへる事莫太也
一頃大ニ流行候得共、氣力なく腹に持不申ニ付自然止申候
白米五升ふかし、八九升になる也、味ともニ煎米飯よりは勝り候、腹しき安程にも無之、古米と新米ほどの違あるへし、随分徳なり
種類粉にするは小麦老升引て、老升式三合ニなる、又煎て引すり候得ハ老升老升式合あり、但大碎のため也
是を煮て三升五合位あり
又煎て能々煮てもよし、○水をしめし搗て用るよりハ手間不入にしてよし、小麦も搗かたし
老斗搗上白五升、中白六升、下白七升位精の大略也、精麦老升煮て此度御下し也、俗に裸麦とも申候
小麦に似て大麦搗安く、煮安く大ニよろし、其為に麦安とゆふ由、岡見願平様御申也

空豆

去ル文化十一戌年凶作付大変安を種ニ御下被下候得とも、凍ニにまけ出来不申、其以来有之候得とも稀也

能作取候ものも無之相見得云行不申候近年耕作師を上方より御取寄御教被下候耕作師の云には随分出来ると申事也、追々試してしるへし

此辺にはなし、是も此度御下しにて御渡ニ相成候、皮こわく、是には困り入申候

豆

其の類にハ無之小豆の類也、細末にして糶にしるもよし

摺て飯に入、糶に用ゆ、又煮て碎きに入、又能煮て搗蓬午はふ葉の類を入豆老升え根花三合位搗返し餅ニ致候得ハ腹保有之宜く候

粉ぬかをふるひにかけ、米の粉也、根花也、入午はふ葉、蓬ちゝ等の類を入餅にする也

粉ぬか飯

右に記候食物、一昨年此方用て害に不相成、其外松皮餅、菓餅色々の食物、市日には山の如く売出し候得共略ス

松皮餅、上皮を去、灰水に煮、其後石のうへにて能た

き、又灰水にて煮白にて能つき、糶のふかしとましへ搗也、但シ叩様の鹿相なると糶の不足なるはすかくすて不

大根積

今年は何方にてても粉糶に手支こぬか、糶の代りに糶の本を刻ミ末にして栗ぬかと交へ、塩と合、大根積にいたし候、随分宜管にも斯ありたし

凶作之備

一、米穀を久敷蓄るにハ混布を下糶に致候得は生ふけも無之宜由
二、大麦を数年貯置候分、少しく有之、夏中取出用ひ候処、虫ク
とふし候て半分程へり申候様にいたし困ひ候得ハ、其憂なし
と、未試

一、蔀は幾年貯置ともよし
一、蕎麦ハ蒸して罎へハ久敷保ツ也、沢処村より得て試し見るに
糶の中の上品なり

人々心かけ置候ても凶年近くして備を無いたし候へと世間有内也

一、別処村長八と申者、百一歳の長寿ニ付、已十月養育之為、御扶持被下候、今以物に前後する事も無之慥也、珍敷長寿と可謂、先年よりの凶作之事を尋るに、無筆なれハ別ニ替りたる

事もなし、只一つの話あり、飢饉の近く、米を勞れ、作を大
切にせよとゆふとか、御上より御ふれのあるものに候其節に
は油断せぬものと申確論なり、なる程天明二寅年にも米穀を
いたわり候様被仰渡あり、此近年蓮沼公御回在之毎度農事の
儀を御諭し、麦を沢山蒔候様被仰渡、麦畑書上等被仰付候
凶作の備被仰含たるハ眠前也

一、文政十一子八月九日、西国筋大風雨、人家吹倒し死傷のもの
多し、同年十一月一日、越后三条大地震潰不少、死傷多有之
由、西国筋作合ハ殊更皆無之由、寅年越后虫付凶作、西国ヨ
リ隣国迄段々如斯、東国の当り前なる事を不知、油断とも愚
とも可申也、後の人御要心可有之

夫に付又記、山本郡ハ式万石余の凶作備に相成候ニ付、三四
年已前郡奉行鈴木午介様御賞賜被仰蒙候由、又阿仁ハ近年來
村毎に凶作備有之、組合五十か処之内と門柱ニ札打候備蔵村
毎にあり、其外郡方御備蔵六ヶ処之内と札打候処々ニあり
比内ニても釈迦内、大館、扇田、二井田、笹館、十二処并ニ
寄郷村々共ニ相応の備蔵有之、糶も無油断時々見回役御廻在
御改被差置候

然るに天道人を滅するの時節にや、辰年不作ニ付、山本、阿
仁を始、多分喰潰し、此節之用に立候は稀也

是ニ付愚按あり、飢饉の備は急と饑饉に備置少しの凶作之助
にハ致間敷也、年毎貸付新穀にて取立る故、毎年借るものと

心得、豊年といえともそれ丈の飯米の仕格不致、小間居の者
油断致也、郷備ニても一家の備にても常には此備有事を忘れ
居様ニ有たし

一、永く畜るにハ鼠喰の損無之様ニ井樓詰にて畜るに如ハなし、
当処の備糶も文政五年井樓詰にて罌置貸付相止申度趣、熊
谷環様え申上、井樓の入方拝領致畜置候所、此度の用に立候
は幸甚之至也

譬は火事に備候要心道具、水籠之類、大豆、粟を入節に用候
ハ、可有弁利に可有之候得共急卒の節、置処を忘れた事を遅
るに至て因て要心道具ハ火事之外には用ひ申間敷事也

此度献上ニ相成候和田の米ハ天明年中よりの糶の由、又万太
役と申小百姓の貯置候粟・稗・蕎麦も天明年中親代より譲之
由、文化年中三ヶ年の凶作去々辰年にも備を不乱候は知勇之
良將是にハ感心也

御分國中預通用之事

享和之頃より通用致候也、久保田兩替屋預在之、城下斗り之
通用、追々文化之頃兩替屋潰に及引替之者山の如をし込騒動諸
人迷惑に及候事有之候、牧野潰ニ付出預引替能代島え被
仰付候由、右功ニ隠居再勤久保田引越候哉、佐々木
茂兵衛潰ニ付、家蔵屋鋪家財御引上、渋屋市左衛門え被下、引

替被仰付候由、其外潰の者は御取扱在之候得とも、兎角御苦からに相成候為致、諸上納役処より預り被指出、文化之末、兩替屋自然と引替ニ相成一円無之候、諸上納預りも八九年以前迄ニは下之仙北共ニ致て稀也預と申もの不見知者勝ニ候処、阿仁御銅山々御渡ニ相成候ニ付至然通用致候

一、能代兩替屋名前預、能代きり通用有之処、文政三辰より巳午迄南部より新銭入込鑲鉄銭也、殊之外悪銭ニ候処、古銭にまじへ通用致候ニ付、金子七貫六文ニ相成、午年御停止ニ相成候

其頃悪銭通用ニ付、諸色高直、金子拾貫文迄致候、奸商之計得ニて能代下夥鋪沖出ニ相成候

依之嚴重之御吟味騒動致候、御追於ニ相成候者モ有

右ニ付銭不足、益預通用能代町人名前預り通用致候様被仰渡あり

一、文政之頃、庄司兵蔵御用達町人被仰付、銅山方御用錢調達被仰付、出預御免ニ相成候由

一、文政十式丑年岩沢作兵衛出預八千貫御免

但、其年婚禮之節省ニ長し、御咄ニて上り屋え被入置、

蔵御封印之処千五百兩之御過料ニて御免ニ相成候由、右

迷惑形申上、此出預り御免ニ相成候由風説あり

一、巳之暮迄は金銭無差別通用致候、巳之暮、猶庄司兵蔵、三ヶ田重右衛門出預御免ニ相成候

処々出預名前左ニ

諸上納役処 御町処備方 湊上納役処

能代方 能代 谷内孫左衛門

播磨屋作兵衛 播磨屋吉助 山田十郎兵衛

菊地長兵衛 野田清十郎 畠 喜八郎

越后屋長十郎 越前屋久右衛門

向能代

岸部新太郎 市河源兵衛 庄司兵蔵

岩沢作兵衛 三日田重左衛門

一、午之春、正銭無之、小売米代之過不差引可致様無之、但小売米ハ預ノ下落ニ不構金銭同様預ニテ相払、小預願申上、五拾文より以下拾五文迄指出候、大館岩沢、大館米座預も有之、右は御免ニて御見済、朱の御印被差出候

其後追々米座なと申小預、村毎村方きり通用と改書致小預夥敷出通用致候、風説ニき応丸之上包紙をきり在之者え払候と申咄有之大笑ひ也

久保田、湊処々小預り之無之村方もなし、五文、拾文逆も有之候

一、預下落のため、諸色高直、飢饉之上、預騒き誠ニ以世上の大変也、午の夏かき放し雇人五百文、七百文迄有之候、正金銭直段宜ニ付、馬なども莫太他領え越、古手木めん之類万事

他領出しニ相成候、右融通ニ付思之外商人宜諸白卷升貳貫八
百文迄致候、酒を飲、飢餓不知ニ暮し候商人不少、右ニ付過
分の利を得たるものもあり、竊にかゝわるほとこの損いたした
る者も有之候

右余勢に付手間取駄賃付なども大ニ助りに相成候、唯他国え
出たる物投捨たる如く下料に売払たるは残念なれとも日用の
品にも無之候得は強て害なし、嗜着の類也、其外馬へ此末不
足致、農事の損あらん故

一、已九月久保田にて大館、扇田登り合人数出預御免被下度願申
上候節、蓮沼様の御意ニハ常ニは預通用不宜候得共、此節ニ
至可用之時節と御申ニ候、歴史ニも有之由御話

太平記内裏造営の処に自昔至今、朝には末用作紙錢諸国
の地頭、御家人の所領に被懸課役ヲ祭神慮にも違、驕誇
の端とも成ぬ、登壇眉知匠も多かりたり

是ハ日本預りの先祖と相見得候

御国にては宝曆四戌より丑迄銀札御執行、百目札より以下五
分、三分迄有、天保五年迄八十年、上にて銀札被差出分
限之者え御札本被仰付候処、總ニ四ヶ年ニ相止、祖父君和右
衛門御札本被仰付、正銀子指上候所、右通用相止候ニ付式百
貫目余之損亡ト日記あり

文化之頃、南部・江戸にても切手と唱紙錢通用自然不融通ニ
相成、金子巻両拾六貫文迄致候所、三四年にすて相止候由

一、此凶作以前甚預通用重宝いたし候、其訳は南部より似セ金沢
山拵候ニ付紛敷、却て金ハ位卑く錢之小數減もなれハ預ハ
重宝致候

錢

明和・安永之頃迄は鐵鉄錢と申惡錢無之処、南部よ
り入込候ニ付最初ハ五割増にて遣ひ候由、然る処公
儀より御不審有之ニ付、五割増ニは無之、五割半ま
せに遣ひ候との御申開之由、町井何某之話也、左候
得ば御免之づく錢歟

文銀

天明以前ハ阿仁・比内共ニ文銀通用有之、相応之分
限にては天秤そなへ置候由、四五拾年以來、今ハ會
てなし、城下ニも稀也、此辺は文銀を知者少し

金

文政元寅ニ歩金通用始る、同ニ卯金銀御吹替、金
ノ位下り候て、文政七申一朱金通用開始、是ハ
至て金の位卑くて本来同年式朱銀御吹替古南籙分量
式兩七分之處、七分を減式兩ニ成る

近年南部にて廣金を拵候者所々不少有之由、時ニ森
岡より御吟味あれとも其節ハ止て又仕かけて已之六
月御吟味ニ付、毛馬内之者七十人程出奔、六七八召
捕られ候由

諸色相場之事

大坂 加賀 富山 越后より御下米穀

一、米苞石ニ付 代拾四貫五百卅六文

二、大豆苞石ニ付 代九貫九百三拾貳文

三、麦安苞石 代 拾貫三百廿七文

四、大麦苞石 代 七貫九百貳拾文

五、小麦 代九貫七百拾文

六、粟苞石 代八貫九百七拾八文

右之通被仰渡候

午四月

但シ村々小売ハ上中下差段あり

一、米直段之儀は已八月、拾一月、午之正月、三ヶ度御定有候得

共、午正月頃より自然相破私売買

一、金銭預と差段無之処、兩度被仰渡有之候得共、私直段大変化

之次第あらまし左ニ

一、金子苞両

代六貫八百文

文政七申より金直段を定置、夫以来

右直段にて已十二月迄通用

八貫文 午正月末より貳月迄

九貫文 貳月廿三日

拾苞買文 午三月廿苞日

拾四貫五百文 四月十四日

正錢拾貫文、預拾五貫文

錢之位、金よりも卑シ

拾八貫五百文 五月朔日

貳拾三貫文 同 三日

貳拾八貫五百文 同廿六日

卅五貫文 六月七日

△四拾貳貫文 同 廿日

三拾五貫文 同 廿三日

貳拾七貫文 同 廿七日

貳拾五貫文 七月四日

貳拾貫文 同 八日

金苞両

拾七八貫文 七月廿日

拾一二貫文 八月六日

時々少し之変化あり、九月・十月・十一月迄大鉢十二貫文

貳拾貫文 十二月

三拾三四貫文 未正二月頃

一、米苞石

代拾貫文 已七月

辰年内六貫四百文迄、已ノ春ハ少々下落気味、六月頃より段

々上り右之通り

式拾貫文 已極月

數米十六七貫文

午正二月迄ニ米直段相替事なし

久保田ハ三斗入拾二貫文

古米

三拾貳貫文 午三月

五拾六貫文 五月十日

五月四日、卷日市村にて止宿之節渡候処、三斗入拾八貫文

と申事ニ候

七拾五貫文 五月廿七日

百五貫文 六月五日

南部米買入、正錢にて卷石式拾貳貫文也

百貳拾貫文 六月廿日

七八拾貫文 同廿九日

六拾貫文 七月四日

五拾貫文 同十二日

米卷石

四拾貫文 七月廿日 八月ニ相至古米廿五六貫文迄

午拾月新米拾貳貫文、極月初方拾六貫文迄、夫より下落

十三四貫文

稗一石

已十月初四貫貳三百文、正金錢

夫より五貫ニなり、阿仁山本木山方諸方にて手を入候ニ付

段々高直、已ノ極月六貫七八百文、能稗七貫五百文迄

粟一石

已ノ年内拾八九貫文より廿卷式貫文迄、

午の春ニ相成三拾貫文、夫より段々八九拾貫文迄

大豆一石

已ノ年内八九貫文、段々引上拾四貫文

午ノ春ニ相成四拾貫文

落 稗卷升、六文より段々引上、廿五文迄、午五六月

炭薪 已ノ年内ハ下直

午ノ冬大高直、薪式貫文より

炭拾貫目、六百五拾文位

塩 午ノ式月頃売買七八百文、段々高直五六貫文迄、米ニ

可次要用品

たはこ 皆かけ式百目位にて百式三拾文之処、段々上り六百

五六拾文迄高直といひ不足といふ品故、困窮之もの

は吹事不叶、木の葉、草の葉の類吹申候

帆を助るものにも無之候、如斯人の好ミ暫時も唯居

兼、口体を養ふハ末世下根に成行候なるへし

和布の粉

卷石ニ付拾式貫文より拾四貫文迄、但正金銭

南部出之品也、卷升ニ付百四拾目位目形也

混布

津輕青森にて拾貫目ニ付八百拾文、四拾貫目卷駄□質諸か

かり悉皆式貫三拾式文

蕎麦種 卷升ニ付預りにて六百文

大根種

已之八月より駄駒南部出し御免

但シ御役立にて

駄卷疋 七百文

駒卷疋 五百文 御役立千七拾三疋

已八月より午十一月迄御勘定之控よりう

つし

奢侈之事

衣

予カ祖父の用たる袴ハ麻也 宝曆之頃ハ一同ニ、家

父の用たるハ秩父絹也寛政之頃、近年は文化ノ末

龍門也

古代は淺黄・萌きなどの裏なり、文政之頃より結城嶋と

食

文化の始迄ハ土瓶といふ物稀也、家毎茶鍋にて茶を煮し

たるものなり、茶も三百文位ハ極上品、珍客に用たる也、

なし

○湯せんにて酒を燗することなし、近年ハ湯せんも度々不

洗候得は、酒の風味不冝と申候

尾張焼の瀬戸もの下り候も文政以来也

最初ハ一ツ式三匁、次才ニ風流を尽し六七匁也、此辺は

瀬戸盃の流行り候は又其後也、式三年前は小皿を沢山出し事なし、竹の手塩皿也

此記録は十二処町肝煎吹谷和右衛門後世え遺置候内写取候、其外御関用達候書拔有之故、追々借受書加え置申度もの也

天保七年

申盆夏

一関市五郎

秘蔵

住

三拾年前には御殿、堂、宮の外こけら屋根といふものなし

眠前我か覚たる事三十年にして如斯、猶老年の話を聞く物毎の移り替り雲泥也

五十年前はふる舞の席え入毎させたるたはこ入持参致ものに無之、たはこ盆えは烟草はそへ、客させるをさし出ス物の由、今以古きたはこ盆に安入あり

客

幼年之頃まで客きせるとゆふもの残り居候、近年銀きせる持もの不少有之候所、文政十一子年已来御儉約被仰渡以來止申候

去夏の頃銀きせる、銀かんさし、南部え沢山持上り致候是等も皆人の覚居る事にて、紙筆を費すに似たれとも、五十年の後如何可有之やと記置候也

天保六年

乙未三月

寛政七年十一月

卯春農調達方差引帳

十二所町

扇田村

二井田村

(ノ関文書 四二二五四)

春農調達覚

一、米百三石式斗五升

此利足拾五石四斗八升八合

但し尅割半

元利合百拾八石七斗三升八合

内

一、米式拾三石七斗五升

此利足三石五斗六升三合

元利式拾七石三斗六升三合

代百九貫貳百五拾貳文

但し四貫文替

内六拾六貫五百文

米式拾三石七斗五升調達、春相場貳貫八百文替

同九貫三百拾文 右利足

式歩ニテ当五月より拾尅月迄七ヶ月分

七拾五貫八百拾文

残三拾三貫四百四拾貳文

一、米四拾貳石式斗五升

此利足六石三斗三升八合

但し尅割半

元利合四拾八石三斗三升八合

十二処町

代百九拾四貫三百五拾貳文

但し四貫文かへ

内百拾八貫三百文

米四拾貳石式斗五升春中調達之分

貳貫八百文かへ

同拾六貫五百六拾貳文

右は利足式歩ニテ五月より拾尅月迄七ヶ月分

百三拾四貫八百六拾貳文

残五拾九貫四百五十文

一、米三拾七石式斗五升

此利足五石五斗八升八合

但し尅割半

元利合四拾貳石八斗三升八合

代百七拾尅貫三百五拾貳文

但し四貫文かへ

内百四貫三百文

米三拾七石式斗五升調達

貳貫八百文かへ

同拾四貫三百文 右利足

但し式分ニテ五月より拾尅月まで七ヶ月分

百拾八貫九百三拾八文

殘五拾貳貫四百五拾文

寛政八年

御帳仕舞郷二井田村控

秋田郡南比内村々酒役銀八錢増上納帳

金字平治支配所

辰十月

御代官

平沢小七郎

定石六拾八石、但し壹石ニ付拾七匁ツム
一、文銀平目壹貫百五拾六匁 扇田村

定石右同斷、但壹石ニ付八百文ツム
一、調錢七貫貳百八拾文 右同村

定石右同斷、但壹石ニ付八百文ツム
一、調錢五拾四貫四百文 右同村

文銀平目合貳貫百九拾目

内七百三拾目 辰十二月納

同七百三拾目 巳一月納

定石八石八斗貳升三合五夕、但壹石ニ付右同斷

同七百三拾目 同四月納

一、文銀平目百五拾目 独結村

錢合百三貫五拾九文

定石右同斷、但壹石ニ付右同斷

内五拾壹貫五百三拾文 巳三月納

一、調錢七貫五拾九文 右同村

同五拾壹貫五百廿九文 同七月納

定石四拾貳石九斗、但壹石ニ付拾七匁ツム

一、文銀平目七百貳拾九匁三分 十二所村

合 文銀平目貳貫百九拾目

調錢百三貫五拾九文

定石右同斷、但壹石ニ付八百文ツム

以上

一、調錢三拾四貫三百貳拾文 右同所

定石九石壹斗、但壹石ニ付拾七匁ツム

一、文銀平目百五拾四匁七分 二井田村

乍恐口上竟

此度当村御百姓久四郎、江戸表え罷登候病氣ニ有付罷下兼候ニ付、於江戸表御屋敷え願申上、去月廿日立駕籠にて罷下候段、右ニ付、当人いかゝ之訳にて江戸表江罷登候哉、出国御般等拜領致候哉、早々相尋書載を以申上候様被仰渡ニ御座候ニ付、内々当村久四郎親類共相尋申候処、当村医者願願より被相頼、世伴玄寿於江戸表大病ニ付、迎飛脚ニ参與候様頼ニ付、罷越候趣故、右ニ付願願段々相尋申候処、委曲左之通申条ニ御座候一、私世伴玄寿義は、寅年医学為執行、江戸山添熙春院様え寄宿罷有候処、当七月、当人より申来候へ、六月中より水腫、其上痢病にて大病ニ相至り、罷下り度趣申来候ニ付、誠ニ驚入不取置、親類とも相談之上、兼て困窮之私、旅用一ト通を以久四郎と申者頼申候て、閏七月式日、急段当人迎ニ遣申候処、世伴事江戸表にて七月廿九日養生不相叶、病死仕候義、此旨申来、扱亦久四郎義是又江戸表ニおゐて病氣ニ有付、罷下兼候ニ付、乍恐江戸御屋舖え願申上、此度御憐愍を以駕籠にて被差下候義、誠以恐入奉存候仍而久四郎為指登候ニも、出国御般にて帰領之上為指登義ニ御座候得共、一子之世伴大病と由来候儀偏ニ世伴之事のミ前後不顧、御般之義も不奉申上、為指登候義、芳々私無念之到、御上様え御苦柄奉掛候義重疊恐入奉存候、乍恐宣敷御取

成を以被仰上被下置度奉願上候

一、右段々奉申候此通相違無御座候、委曲願願より申出候通、別

紙書附ともニ指添、奉申上候間、御被見被成下、御憐宣敷様

御取成被仰上被下置度奉願上候

全躰出国之御般拜領仕候て為指登可申候事と奉存候得共、偏

ニ一子之世伴大病と承り、前後忘却仕、不奉申上候間御般之

程、恐入奉存候、且重キ御苦柄筋を以当人御下被成下候儀、

誠ニ難有仕合偏に恐至極奉存候、何分御憐愍を以宜敷様御取

成被成下、当人御助被下度、乍恐奉願上候

右之趣、乍恐宜敷様被仰上被下置困窮之当人御助被成下度偏ニ

奉願上候、以上

二井田村肝煎

寛政九年

一関平兵左衛門

己九月

同村長百姓

多治兵衛

平沢小七郎殿

甚五兵衛

右は長百姓三之助を以、九月久保田え

出府申立候

文化十一年

鄉
中
定
書

成十月廿三日

(一 関文書 六五)

肝煎退役ニ付以来郷中申定

覚

一、当戌年肝煎免米之儀は古役仮役ニて拝領可致候、尤米高之内

三式は古役、三ヶ巻は仮役ニて配分可致候

一、来亥年分追々相談可致事

一、肝煎かつき高式拾石之儀は是迄御郷役五斗銀郷中ニてかつき
置候得共、格別相談之上今年より相改、先年之通り郷中ニて
かつき申間敷事

一、御郷役五斗銀取立之節は長名立会之上積立可申事

一、肝煎免米并御扶持米等之義は御定法之通り苞斗減ニて可相渡
事

一、村備米配分之節は是迄之通り郷中ニて請取可申事

一、不時ニ御高割銀穀被仰付候節は惣高え割合可致事

文政十三年

御用米銀被仰渡書附写

庚寅正月吉日

借用候米之事

米五拾石

但輕升

右者為御用去戌年中借用候処実正也、追而返済可申候、為其如斯候、以上

田所勘左衛門

宝曆五年亥四月廿五日

関 五郎左衛門

秋田郡

二井田村

重兵衛殿

前書之通心得候、以上

亥四月廿五日

秋田郡

二井田村

重兵衛との

小瀬宮内

借用候銀子之事

銀匱買目 文字銀也寛延二巳年御取替本銀

内式拾目 明和三戌五月文銀ニ而被返下候

右者為御用借用候処実正也、右銀追而返済可申候、為其如此候、已上

此候、已上

明和三年戊五月廿一日

松塚角右衛門

大槻五郎兵衛

岩屋弥兵衛

石川又左衛門

黒木權右衛門

小田部縫殿右衛門

二井田村

十兵衛殿

前書之通心得候、已上

戊五月廿一日

小野寺桂之助

二井田村

十兵衛との

覚

此度御備糶輕升式百五拾石、為冥加指上申度趣申上候ニ付及御沙汰候所、深切之事ニ被御聞届御称言被成置候

尙未子孫ニ至若困窮ニ相成、願申上候ハ、御積を以可被返付候旨御沙汰候条可得其意もの也

文化三年

橋本甚之丞

寅三月

秋田郡二井田村

一関重太郎との

覚

一、粗式百五拾石

一関十太郎

右者御備蔵御普請出来ニ付、今年上納被仰付候間取立可被

成候

巳九月

会田久左衛門

覚

一、文銀百目

一関重太郎

右之通此度仁指御手伝被仰付候間、此度之御義を奉存、早

速御受可申候

文化三寅

四月

会田久左衛門

覚

一、文銀壹貫五百目

右之通受取申候、右者去拾貳月中江戸上御屋敷御殿無残御

焼失ニ付、人差御用銀被仰付、右錢上納之時、已上

高橋多右衛門

文政三年

高井藤右衛門

辰貳月十八日

加藤主税

水谷軍八

秋田郡

二井田村

一ノ関重太郎殿

覚

一、調錢五拾貫文

右者一関重太郎殿より御役屋御手伝錢之由岩屋十右衛門様

御移被相成候、御伺之上上納可仕為念如斯ニ御座候、以上

綴子村仮役

藤嶋喜蔵

同

三沢万右衛門

享和貳年戌五月晦日

二井田村

安達甚五兵衛殿

同

平沢安兵衛殿

寛延式巳十二月廿日

一文銀壹貫目

宝曆五亥四月廿五日

一、米五拾石

宝曆八寅年

一、米拾式石

宝曆十二年

一、同式拾三石八斗五合

銀合壹貫目

米合八拾五石八斗五合

右四筆者野内藏人様御勤役中肝煎与右門書上致候写也

一、調錢三貫五百文

文化六年

巳五月廿七日

二井田村

肝煎殿

山方龜太郎

右者冥加金上納受取申候

当高壱石

六成

秋田郡

櫃崎村

本田

右は近年來御財事向御要用深切ニ相弁、御用立本錢百貫文

御断被成置候ニ付、右高永久被下置候間所務可有之候

万一後來訳柄有之、御引上被成置候ハ、右本錢無殘可被返

付候

依而證文如件

文政六年未十二月

塩沢源吾

町井政七郎

一関十太郎殿

口達

近年來御財事向深切ニ相弁、且御用立本錢百貫文御断被成置候ニ付、当高壱石櫃崎村にて永久被下置候、当村之儀は御地行分本田高無之ニ付、右開之内を以本田代ニ御配当被成置候、向後右高之内川欠等有之候ハ、御代知可被下置候、且此節村方収納相濟候間、今年限銀穀共ニ御蔵出を以可被相渡候、以上

未式月

秋田郡

南比内二井田村

肝煎

一関重太郎

御備粉五百石都合指上候段深切之至候

依而為御賞永々苗字帯刀御免、式代式人御扶持被下置候、此旨可被申渡候

十一月

但し御扱様会田久左衛門様也

于時文化六己巳十一月六日

覚

一、鞍卷背

黒塗馬之紋所

一、鉄鎧沓足

龜之象眠

右之通秋田郡南比内二井田村肝煎一関重太郎より此度指上

候ニ付請取申候、以上

文政三年

辰八月十一日

江橋形右衛門

林 儀左衛門

芳賀沖負殿

秋田郡二井田村

肝煎

一関重太郎

長百姓

永蔵

当秋御渡野之節、同村御小屋前ニ相成候所、右惣入料兩人ヨリ指出度趣申出、深切之至候

依而御賞言被成候間、此旨可申渡候

十二月

文政六己巳九月

郡奉行橋元甚之丞様

郡方吟味役会田久左衛門様

覚

二井田村

一関重太郎

同人親平左衛門御改已来御開筥出精不少御出高ニ相至、右出高御備ニ指上候義深切ニ被思召置、右同御称当春中生涯三人御扶持被下置候所、其後間も無之病死致候

仍而此度格別之御吟味を以、右三人御扶持引継子とも重太郎

江生涯被下置候間、此旨当人え可被仰渡候、以上

八月十六日

寛政十二年申三月十九日郡奉行

田崎助之丞様

覚

秋田郡二井田村

肝煎

一関重太郎

并郷中へ

役豊田定左衛門様也

当村肝煎一関重太郎親肝煎勤中より肝煎免并飯料余米等取合五拾石郷中え備ニいたし度趣、此度申出候ニ付、及御沙汰候所深切之至御称言被成置候

被仰渡覚

一関平左衛門

御蔵へ備置長共無承末様ニ取扱可申候、小百姓共飯米不足いたし早秋より未熟之青稻等刈取迷惑いたし候者も有之候ハ、当作見届之上減米為借置、拾壹月中吟味役廻在之節勘定帳指出候様ニ被仰渡候、右之趣可申候、已上

自分儀年来深切相勤、是迄数度御称も被成置候得共、猶出情相勤、且漆木植立候儀心を用へ出精相勤候付、此度格別之御吟味を以一代苗字御免、漆方御用之節者帯刀御免被成置候

二月

亥二月

橋本甚之丞

寛政三亥三月廿九日、於御用
処御代官成田茂吉様

覚

二井田村

二井田村肝煎

市五郎

一関平左衛門

其方儀深切之勤方被為御聞、此度老衆ニおゐて御逢可成候段、以町送被仰遣候間無間違出府可有之候、以上

十二月

自分儀数年心を用ひ相勤、且漆木格別出情取立候ニ付、去ル亥年一代苗字御免、漆方御用之節は帯刀御免被成置候処、去春米高直ニ付手元不及申、寄郷村々共備米手配致、数月取扱候儀旁々深切被思召、依而此度為御称銀子五拾目被下置候上、一代帯刀ニ御取立被成置候

三月

寛政六年寅三月二日、於御部

屋御老様御列席にて被仰渡候
御月番但馬様也、御取扱御添

以町送申達候、然は去秋中より扱所村々渴命躰之者、各是迄深切之取扱形先頃拙者帰之上精々申上置候処、時共間於御用所御本方奉行近藤喜兵衛殿、御副役豊田正蔵殿を以一学殿被仰渡候は三親郷肝煎共渴命躰之者深切之取扱、依而御褒美老人之銀子百目宛被下置、猶又御老衆御逢被成候而御称被成置候段被仰

渡、於拙者も難有奉存候

右之通被仰度候間、各早々出府可被致候、尤申渡候ニ相及不

申候得共、麻上下用意可被申候、以上

正月廿七日

熊谷宅兵衛

二井田村肝煎

平左衛門殿

扇田村肝煎

市郎兵衛殿

十二処町肝煎

嘉左衛門殿

覚

二井田村肝煎

平左衛門

扇田村肝煎

市郎兵衛

十二処町肝煎

嘉左衛門

右之者共去作不熟ニ付寄郷村々并銘々扱之者とも深切之勤方
兼而被聞及、依而老人ニ付銀子百目宛被下置、猶年寄衆御逢被
成置被賞置候間一学殿被仰出如斯ニ候、以上

正月十一日

天明四年甲辰正月十一日、御
代官熊谷宅兵衛様也

一文銀貳貫五百目

右は御仁指にて被仰付候

御受留は于今不被下置候分

文政十一年戊子二月御支配蓮沼仲様御扱芳賀沖負様也

秋田郡

二井田村

一関重太郎

親平左衛門代より肝煎役深切ニ相勤、硯石等指上、且此度郡
方御備え文金三百五拾兩、硯式百五拾石、為冥加指上申度願申
出寄特之至候

依之格別之御沙汰を以郡方御備より永拾人御扶持被下候条勤
有可奉存候

十二月

文政十二丑十二月御扱芳賀沖
負様御支配蓮沼仲様也

覚

秋田郡

二井田村肝煎

一関平左衛門江

見分林取立加勢

田村要兵衛

林取立役

羽生 惣蔵

同

湊 与市

同

大森 礼蔵 印

但し年号共に相知れ不申候

文政貳年

卯九月

見分同

田名部源太

同

白井角兵衛 印

同

菊地正三郎 印

御勘定吟味役木山方片付

片岡 敬助 印

同

小介川隼人

同

加藤清右衛門 印

自分儀数年心を用ひ相勤、且漆木格別出精取立候ニ付、去ル
 亥年一代苗字御免、漆方御用之節は帯刀御免被成置候処、去春
 米高直ニ付手元不及申、寄郷村々共備米手配致、数月取扱候儀
 旁々深切被思召、格別之御吟味之上為御称銀子五拾目被下置候
 上、一代苗字帯刀ニ御取定被成置候

三月

御直山前田沢之内

此丘尼沢

東西両平泥地南まで水落次才

北ハ中長根出崎沢江両平境森限

右沢処先年より御直山ニ候所、空山同様ニ相成候ニ付、麓前
 田村へ取立之儀殿ニ被仰渡候所、小郷困窮之村にて行届兼候ニ
 付、二井田村一関十太郎杉植立致度前田村へ示談之上双方より
 願申出ニ付、去丑年願之通十太郎へ植立被仰付、此度右沢処見
 分之上右方限之通永久為任置候

杉成木之上御定通御割合を以可被下置候間、出精植立可致候

南比内

二井田村

一関十太郎殿

覚

南比内前田村之内字処、觀音堂脇松雜木林沓ヶ処

但東西五尺純ニテ百尋、南北同式拾七尋

右林地形共先年より前田村与助持分林ニ候処、双方勝手ニ付

去戌年拾式月中其元え永代ニ買取候ニ付、此度右地形方限共見

分之上前田村肝煎并売子共遂吟味候処相違無之候、杉植立之者

江成木之上三七御割を以可被下置候故出情取立可致候、以上

大森 礼蔵

田村要兵衛

文政二年

卯三月

南比内

二井田村

十兵衛殿

覚

南比内前田村之内字処

漆木沢松雜木林沓ヶ処

但南西前田村草飼小道切、東へ下段堀切境より南小道違

ヒ迄、北へ与四右衛門林境堀切迄

右林地形共、先年より前田村与右衛門、多助持分ニ候処、双

方勝手ニ付、去ル戌年其許永代買取候ニ付、前田村郷人共立合

見分致候処相違無之候、杉植立之分成木之上御定之通三七御割

合を以可被下置候故出情取立可致候、以上

大森 礼蔵

田村要兵衛

文政三年

卯三月廿八日

秋田郡

南比内

二井田村

十兵衛殿

覚

南比内下川原村之内字処

提尻杉雜木林沓ヶ処

但幅拾沓間、長サ式拾五間

此坪数式百七拾五坪

右林地形共、先年より下川原村今右衛門持分林ニ候処、双方

勝手ニ付去酉年六月中其元永代ニ買取候ニ付、此度地形方限共

見分之上下川原肝煎并売主とも遂吟味候処相違無之候

杉成木之上は三七御割合を以可被下置候間出精取立可致候、

以上

大森 礼蔵

田森 要蔵

文政二年

卯三月

秋田郡南比内

二井田村

重兵衛殿

覚

秋田郡南比内八木橋村地形五輪台村之内与四兵衛沢

北ハ萱ケ沢入会草飼馬道切、西ハ平馬長根より南江折廻

堀切迄、同堤の沢水流万右衛門林境まで、東ハはふ田切

り

右は地形五輪台村符人仕兵衛、松兵衛、茂吉所より文化十西

年中永久買取、同村兵九郎所より同拾貳亥年中同断買取杉松共

取立林ニ致度依願此度見分吟味之上右方限之通地形永代可為勝

手候、杉成木之上三七御割合を以可被下置候間出精植立可致候、

為後來證拠如斯ニ候、以上

文政二年卯壬四月

田村 要蔵

羽生 惣蔵

湊 与市

大森 礼蔵

田名部源太

白井角兵衛

菊地山三郎

南比内

二井田村

一ノ関重太郎殿

覚

南比内八木橋村地形之内与四兵衛沢南ハ平馬長根入会村々萱

沢往来草飼馬道限、西ハ長根境水落次才、北ハ川限五輪台村草

飼道打越平中堺塚通、夫より向キ台のはふ境、東ハ長根通小道

境、南ハ馬道限林ニ立置、杉雜木植立申度、願之通地形被下置

候、永々取立可為末代勝手候

右は文化九申年中八木橋村之内五輪台むら符人藤右衛門上

り買取候ニ付、仍願證拠被下置候、此末出精可被取立候、

以上

文化十二年

亥八月

田名部源太

白土儀右衛門

大川六郎右衛門

白井角兵衛

菊地山三郎

南比内二井田村

一関重太郎殿

同式升

同式石四斗六升五合

当村重兵衛、清吉江四六之御割合
二而六ニ相当ル分辛勞免被下候分

内卷石式斗三升三合

重兵衛江被下候分

内卷石式斗卷升九合

已開

同卷升四合

午開

同卷石式斗三升式合

清吉江被下候分

内卷石式斗卷升八合

已開

同卷升四合

午開

覚

蓮沼仲支配所

吟味役

同四斗五升六合

当高安兵衛江十步卷辛勞免被下候

分

秋田郡南比内二井田村長百姓重兵衛、清吉願申上候は当所字
如大向、於郡方御開発被成置候所、文政三辰私共加銀被仰付、
同年ヨリ堰根、堰筋、水門普請仕、起方共入料不少相懸、且当
村長百姓安兵衛普請起方世話方共出精致出高ニ相成候ニ付、御
檢使御序を以御調被成下度奉願上候ニ付、御檢使被指越、肝煎
・長百姓御忠進主世話人共先立為致、水元堰根、関筋開発場見
分致吟味相調候所出高左之通

右之通調出高ニ相成申候、且安兵衛普請并起方とも格別出精
辛勞被思召、此度相当高之内拾步卷、同高四斗五升六合辛勞免
ニ被下置候、残四石卷斗八合重兵衛、清吉物入辛勞之功ヲ被思
召、四六之御割合にて六ニ相当ル分式石四斗五升六合、兩人え
辛勞免被下置候
但休明年より七ヶ年中荒地川欠有之候時は安兵衛、重兵衛、
清吉辛勞免高え御割合被仰付候、且開発残場所不少有之候間出
精開発可致候

当高四石六斗八合

新開

内卷石六斗四升四合

御蔵分

内卷石六斗式升四合

已開

右之趣、御吟味之上相濟被仰渡候間此旨二井田村長百姓安
兵衛、重兵衛、清吉え可被申渡候、已上

午十一月

諸岡三兵衛
戸沢彦太郎

覚

蓮沼仲支配所

郡方吟味役

秋田郡南北内二井田村重兵衛兼て郡方にて村々御開発ニ付加
銀主被仰付出銀致候故、此度出高之内より左之通辛勞免ニ被下
置候

一、当高壱石 新開
休明

小袴村

一、同高壱石 右同断

大披村

一、同高貳石

起返り

寺崎村

新開休明

一、同高壱石三斗

式升八合
未開戌年

出川村

より休明

右之通四ヶ村出高之内御積を以五石三斗式升八合辛勞免ニ被
下置候間休掛り之分は休明年より所務可致候

右之趣御吟味之上相済被仰渡候間二井田村重兵衛之可申

渡候、以上

未拾貳月

文政六年未正月相達申候

御扱芳賀沖負様

覚

蓮沼仲支配所

吟味役

秋田郡村々郡方御開発ニ付、比内二井田村御百性市五郎親重
兵衛存名中加銀主被仰付、兼て出銀罷有候ニ付、此度御手入村
々当酉年より休明高之内にて御積を以左之通市五郎之辛勞免被
下置候

一、当高六石八斗七升貳合

山館村

一、同高貳石五斗

餌釣村

右当高合九石三斗七升貳合

右之適當酉年より休明高之内にて辛勞免被下置候

右之趣御評儀之上相済被仰渡候間、二井田村御百性市
五郎之可被申渡候、以上

酉十二月

佐藤吉郎右衛門

諸岡三兵衛

武藤 東治

戸沢彦太郎

文政八年酉十二月被仰渡候

御扱芳賀冲負様

覚

蓮沼仲支配所

吟味役

秋田郡村々郡方御開発ニ付、南比内二井田村市郎兵衛兼て加

銀主被仰付出銀罷有、此度比内村々郡方御手入出高二相成候故、

御横を以左之通辛勞免被下置候

一当高八斗五升式合 開休明 二井田村

内五斗七升式合 上り知開起返り

同式斗八升 給分開起返御引上之内

一同高式石老斗四升八合 畑返新 杉沢村

開休明

一同高五石五斗 休明 片貝村

内老斗九合 開起返之内

同五石三斗九升老合 畑返新開之内

右三ヶ村当高合八石五斗 休明

右之通比内右三ヶ村休明高之内前割之通都合八石五斗御横を以二井田村重兵衛え当申年より辛勞免ニ被下置候

右之趣御吟味之上相濟被仰渡候間、二井田村重兵衛え可被申渡候、以上

申十二月

佐藤吉郎右衛門

諸岡三兵衛

武藤 東治

戸沢彦太郎

覚

秋田郡南比内

二井田村

一ノ関重太郎

右者於二井田村質屋家業願申出、自今永久定置候もの也

文政八年酉三月

蓮沼 仲

郡方
質家符

已文政十二丑四月
秋田郡二井田村
一ノ関重太郎

二井田村

肝煎

一関平左衛門

開発自分物入を以取扱辛勞免も拜領不仕、出情仕候ニ付、為御称生涯三人御扶持被下置候

寛政拾貳年申

三月十九日

右之通田崎助之亟様御勤役中大館町徳右衛門之苗字帯刀御免、手元扇田村肝煎市五郎之苗字生涯式人御扶持、十二廻町肝煎和右衛門之苗字御免

中野村肝煎武左衛門之苗字御免

扇田村長百性彦市之苗字御免、除地ニ居下被仰渡候御免にて

但し同様ニ一紙にて有之候

天保十三寅年郡方御備之内より当高拾五石為辛勞免永々拜領被仰付候

右錢上納方左之通

一、金五拾兩 天保十亥年御調達被仰付差上候分

代四千五百貫文 但巻兩ニ付九拾貫文相庭

内千貫文 米拾石にて御返し被さし引

残三千五百貫文

一、貳千貫文 右は男鹿御仕入砌御調達被仰付差上候分

〆五千五百貫文

此辛勞免拜領願

当高六石八斗七升五合 但し巻石ニ付八百貫文中考
同高三石

右は天保二卯年安達清右衛門と手元兩人之当高五

拾石 内安達 顯相濟拜領被仰付候砌、当村御出高
同手元

之内を以四拾五石被仰付、五石不足ニ拜領仕候分、此度願相濟拜領被仰付候 内貳石安達 同三石手元

同高五石六斗

右は石同年被下候御高上り知にて可被下置候処、

当村御借高高御出高之内今以被下候ニ付行違損分有之、右御償之ため足高願相濟被下候分

合拾五石四斗七升五合

内四斗七升五合 切捨

残高拾五石 永々拜領

右は天保十三寅年六月、笹館村肝煎渡辺名右衛門相頼、同日出符御扱木村惣蔵様より右御高永拜領

之御書附有

外当高式石也

右は此砌安達永蔵前々より御調達有之ニ付、当高拾八石五斗手元同様拝領ニ相成候内、安達ニ御郡方御蔵本勤中手元御扶持米辛勞免高御小役不少手元え渡り錢米共有之、右分米錢ニて相渡候ては迷惑ゆへ右当高式石を以手元江相片付申度旨笹館村肝煎渡部名右衛門を以願候付、其意ニ任せ遣安達より引受候分

合拾七石

右者永々手元分

○御高割并ニ仁指米共三ヶ年等分納之事

○老郷備は右御用米皆納相済迄御弛メ願之事

○御内町より御無尽等之被仰懸無之様に願候事

上
○御用歩往来之砌涉り賃無之様被仰渡被下度候事

○遠方御収納米御相庭定被置被下度願候事

右之通り御扱様江願上候
南三ヶ処扣也

万延元年申十月十七日
於御役屋指上候

乍恐書附を以奉願上候御事

此度御用米御高わり石ニ付九升、外ニ指立ものえ人指ニて夫々被仰付、右上納之向之義ハ当年六ニ相当り候分上納、残りハ来酉戌兩年上納ニ被仰付、一通り御請申上候、然ハ当夏中より不気考ニて不容易不作ニ可相成と見居候処、残暑ニて思の外作合も直り候得共、下地不作と見居候処を思の外直り候故豊作とも申唱候のミニて米取り甚々不足、且又去年中之後れも有之、

一、当夏中被仰付候郷備米、当年より五ケ年中全備可致被仰渡候得共、去年之おくれ、当年作合等此度被仰付候御用上納、此上郷備米迄取立候事ニハ逆も取纏ニ相成不申候間、此度被仰付候御用上納相濟候迄御弛り被成下度奉願上候

一、近年來不作打続、此上御用銀御調達等年々之積ニ被仰付、御百姓共難渋困窮ニ相成罷有候

然処御地頭様、又ハ重き御方様杯とより御無尽被仰懸時々々之、難渋罷有候事故、御訴訟申上候得共、押候て被仰懸候てハ勞煩等相生し右等付以て右遣等夫々不少相懸り如何共迷惑

千万ニ奉存候、乍恐御百姓共手段ニてハ相成不申候間、御上ニおゐて左様躰之義無之候様被成下度奉願上候

一、担丁場普請、歩伝馬共往來之節、先年は渡錢相掛ケ不申候処、近年來船守りニて受取不申候得ハ通候事不相成候趣申聞ニて無換相渡し往來罷有申候得共、御用歩之事ニ候得ハ相渡し可申様無御座候間、以来は相渡し不申候様船守村九居て被仰渡被成下度奉願上候

一、御城下並ニ能代共御収納米代物相場不同有之、村々迷惑罷有申候

私共村之義ハ大館・扇田市へ米売出し、右を以代納仕候間、右相場ニ準居被置、村々不同迷惑無御座候様被成下度奉願上候

右之通り御時節柄願奉申上候も恐入至極ニ奉存候得共、難渋之処候間無構願奉申上候へは、何卒御憐れを以願之通り被仰付被下置、困窮之御百姓御助被成下置度偏ニ奉願上候、以上

二井田村肝煎

一ノ関平左衛門

扇田村肝煎

山脇平右衛門

万延元年

申十月

十二処町飯肝煎

清吉

利兵衛

小野崎藤四郎殿

上

四ヶ村加郷
村々

乍恐書附を以奉願上候事

一、去ル申年四ヶ駅より出符仕、御上様え願奉申上候は仮令蝦夷地御警衛人馬繼立ニても本駅定式役人馬遣立引居候加郷ニて、引請相勤候儀は先年之致来ニ御座候処、本駅ニては蝦夷地御警衛之儀者御軍事御用ニて新ニ相始りてより隨左様ニ候得は本駅加郷同様迷惑致し候て人馬繼立可申趣被仰付候、加郷村々之取請形りは新ニ相始り候事ニ御座候、御境郷橋々守護之村小繋屯里涉り船詰御免之村々相勤候事相致り候得は、甲乙も無御座候間、人馬平均御遣立被成下度候趣、御上様え奉願上候処、御扱小野崎東四郎殿御意ニは御支配御廻在御取極之上被仰付候間、平均人馬繼立之事ニ被仰付候故、出符人罷帰り申候

同年四月中御支配志賀猪三郎殿御扱小野東四郎殿、見廻役橋本助右衛門殿、大館御役屋ニ於て被仰渡候は白沢駅ニても加郷馬え御境郷差加候は其駅え差加ひ候趣被仰付候加郷村々奉申上候は白沢駅小繋屯里涉船駈之儀は辻れ駅之為ニ村教御記候て已かと取請罷有申候

其詮御警衛無之候得は御境郷村々加郷勤可申筋無御座候、右御境郷相勤候事ニ相至候ハ、五ヶ駅共甲乙無不同平均人馬遣立ニ被成下度旨加郷村々より願奉申上候得共御取上無御座候、御支配志賀猪三郎殿、小野崎東四郎殿、橋本助右衛門殿御意ニは、五ヶ駅共々御高不同ニ候ハ、白沢駅八千三百六拾石ニ

相成候丈ケニ大館・綴子兩駅え御郡方より御價高被下置候間、右ニて御請可致候趣、敵ニ被仰付候故、無拋奉畏候

然る処此度御郡方御價高御引上之趣被仰渡奉畏候得共、綴子駅・大館駅莫太之迷惑ニ奉存候間、屯里涉り船駈、五ヶ駅共々平均人馬繼立ニ被成下度奉願上候

五ヶ駅共々人馬繼立平均ニ被仰付候

阿仁・比内平均米高え式匄銀御同様御取立被下置候て御上様之御積りを以、其駅毎ニ御出金を以御助成被附置被下置度奉願上候

右之儀も被仰付不被下置候ハ、阿仁・比内と御担処分付ニ被成下度奉願上候、阿仁五向米御高は屯万六千石余、比内五向米御高も屯万六千石余ニて甲乙も無御座候

阿仁道法里之儀は屯里渡り屯ヶ処、小繋駅より綴子まで三里、綴子駅より大館駅まで五里、都合屯里渡りより九里之里程ニ御座候、比内道法里は大館より綴子え五里、大館駅より白沢駅え式里、同駅より津輕碇ケ関え四里、都合拾屯里ニ御座候、其上碇ケ関之大難処を相抱、比内道法迷惑勝ニ御座候得共、御担処分ケニ被成下候得は人馬繼立混雜等も無御座、每度勞煩も無御座候間、何卒御憐愍を以御担処分ケニ被成下度、乍恐偏ニ奉願上候御事

乍恐五ヶ駅共々不同、左之通りニ御座候

白沢駅

一、高六千三百五拾石右は先年より加郷 郷高
外ニ

一、高貳千十石ニ此度被仰渡候新加郷

但し御境郷橋々守護之村々共

八千三百六拾石

大館駅

一、四千六百七拾八石

右同断

外ニ

一、五百九拾石ニ此度被仰渡候新加郷

但し船詰御免、橋田村橋守護御境郷村々

五千貳百六拾八石

綴子駅

一、高五千百拾石

右同断

内千石ニ

減り高

右は二井田村・八木橋村・達子村

右三ヶ村減り高

残り高四千百拾石也

但し綴子駅ニ相限り先年より勤候御高より千石減り高ニ相成
り、他駅ニては先年より勤来候有り高より御境村々相加里候

故、別段相聴申候

綴子駅加郷高千石ニて相勤候得は、白沢駅貳千石之勤高ニ相
成、往々潰れニ相成候外無御座迷惑千万ニ奉存候間、綴子駅

御助被下置度奉願上候

尚又奉申上候通り式勿銀同様之御取立被下置候て、其駅毎ニ

御助成被付置被下置候也

又御担処分ケニ被成下置候得は、平均人馬継立ニ相成候故、

右両条之内、沓ヶ条御取上被下置候得は少しも迷惑無御座候

間、願之通り被仰付被下置度乍恐奉願上候

小繫駅

一、高三千三拾七石 先年より加郷

郷高

此駅斗り出減り無御座候

荷上場小繫沓里涉り船駅

一、同七千七百貳拾貳石

右同断

右は先年より沓里涉り船駅ニて致来候得共、四ヶ駅よりは

莫太不同之御割合故かと取請罷有申候、加郷村々之取請形

りは右沓里涉り勤高之儀は貳千五百石、高ニて船通用行足

り候かと取請罷有申候、極意減少仕候ハム式千石高ニて相

勤候て宜敷かと取請罷有申候

外ニ

一、高千百拾九石

此度被仰渡候

新加郷

八千八百四拾壹石也

内式千石高ニ船通用致候得は

残り六千八百四拾壹石

過高ニ相見得申候

右之趣、宜敷様被仰上被下置候て願之通り被仰付、困窮之御
百姓共御助ケ被下置度奉願上候、以上

白沢駅

大館駅

綴子駅

小繁駅

右村々上り

文久三年

亥十月

国安久治殿

上

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 上 and 下）

(一) 関文書 一四七

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 上 and 下）

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一、七月四日、当処長百性安兵衛、喜三郎御催促御用ニテ罷上候
処、達子村一件之儀ニ付御内事之御取扱御叮嚀被仰合、難有
仕合ニ奉存候、尙向村へ訴訟可致趣被仰付候故、則扇田村肝
煎方迄長百性小左衛門、勘右衛門兩人指遣し申訳仕候所、何
れ達子村郷人え相談之上挨拶可致趣被申候故、何分共御相談
之上御免被下度段相頼長名共罷帰、猶又翌五日肝煎方へ長名
兩人指遣候、昨日御願仕候通御相談被下候ハ、宜敷御挨拶被
下度段申談候所、達子村地主催足致候処、持病之由并長石共
他行致候得ハ、何れ達子村へ罷越可申様ニ被申候故、翌六日ニ
達子村地主方へ長名兩人罷越色々申訳仕候所、天龍院え相談
之上挨拶可致趣被申候ニ付何分宜敷御相談被御免被下度段相
頼罷帰申候故、尙又七日長名共兩人地主方へ罷越申訳仕候所、
天龍院方へ当処長名共ニ罷越可申段被申候故、当処長名共挨拶
仕候ハ、根元其御仕郷中より両使ヲ以此方郷中へ御断ニ御
座候得ハ、天龍院方へ罷越可申様無之、何分於郷中偏御免被
下度段相頼罷帰申候

其節肝煎重太郎方罷越相頼罷帰候得共一切挨拶無之趣被申、
中々了簡之気色も相見得不申候故、又々地主方へ參候処笹館
村へ罷越、留主之趣ニ御座候ニ付、則長名共笹館村え罷越、
地主え対談仕、天龍院方へ色々申訳致候得共、中々聞受不申
全鉢天龍院え申訳候筋無之候得共、双方相濟候事ニ候得は、
此上も無之事ニ奉存罷越候所中々取受不申、左候時ハ達子村
郷中にて天龍院御同意ニ御座候やと申断候処、御挨拶当惑仕
候、何レ扇田村肝煎え取合御挨拶可致趣申聞ニ御座候故、長
名共罷帰申候
尙又則昼頃長名兩人ヲ以申遣候ハ去々年中御願之儀、其節郷
中へ相談致候所、誰も天龍院と音信不通之者も無之由掛合仕
候処、左候ハ去々年中祭礼之節如何致候て使も無之趣天龍
院申掛ニ御座候故、其儀ハ天龍院専人ニも相限不申、兼て被
仰渡等も有之、村方物入増ニ相成候時ハ迷惑ニ御座候故、先
年修檢衆拾人相頼候処、御七人ニ減少致候故使不致趣掛合ニ
相及候処、何れニ致候ても此末祭礼之節使無之候得は此度一
件了簡不相成趣申掛ニ御座候故、彼是御時節柄御苦柄奉掛候
儀も恐入奉存候故、以来事ニ寄り相頼可申趣長名共ヲ以掛合
ニ相及候所、去々年中二井田村三光院え掛合致候儀も有之、
同人罷越候ハ、掛合之上挨拶可致趣申聞ニ御座候得共、此度
之一件数度申訳仕候得共、一向取請不申唯々去々年中より同
人相頼不申事斗り申掛ニ御座候得ハ此上如何共訴訟可致様も

無御座候間、何分共御威光ヲ以向々御内濟ニ相成候様被成下、
極窮之御百性御助被成下度奉願上候
右之段々奉申上候間、御隣悉を以御助被成下度偏ニ奉願上候、
以上

二井田村肝煎

一関重太郎(印)

同村長百性

辰七月九日

多治兵衛(印)

同

安兵衛(印)

坂元門治殿

あとがき

本書におさめられたものは主として国立史料館所蔵の秋田県大館市一関文書のなかから取上げたものである。

「宝暦九年、御目附祿御下向之時被仰渡候御書附」は、火災等の事情できわめてとほしい大館町の一八世紀中期の様子があつる程度判明する。また宝暦銀札仕法の廃止直後の時期のこともあつて藩政史をみる上でも興味ある内容である。

天明・天保の大凶作は東北各地に大きな影響をあたえたが、とくに前者のそれについての資料はそれほど多く紹介されていなかった。「天明三年、御貸米御調帳」以下は凶作の見聞を記した資料とはその性質を異にするが、他に比しても比較的多いこの時期の同家文書のなかから大館周辺村落の問題をみていくにさいし参考となるもの的一端を取上げたものであり、天保期のそれもほぼ同様な観点から取上げたものであるが、紙幅の都合もありその若干をとり上げるにとどまらざるを得なかった。

次に近世後期の村落の動向を伝える数点の資料と、近世中・後期の一関家の調達御用金銀を記録した一資料を収めた。

なおここにおさめられたものは大館市史編さん委員会が調査採訪したものを中心に高橋秀夫の協力を得てまとめた。

また最近大館市仁井田の一関家の文書調査が同家の御好意で実現し、同家にはなおかなりの多数の近世・近代資料の存在が確認され、一応の整理がなされ、現在その検討がなされていることを付記しておく。

大館市史編さん資料

大館市史編さん資料 第八集
大館市史編さん委員会
大館市史編さん委員会
大館市史編さん委員会

大館市史編さん資料 第八集

大館地方資料文書

編集者 高橋 秀夫

昭和四十八年三月

大館市史編さん委員会

印刷 大館市谷地町

(株) 大館孔版社